鎌倉出土かわらけの系譜と編年
－東国社会の変質と中世の成立（前）：研究史と用語の定義

Lineage and Chronology of Small Earthen Plates “Kawarake” from Kamakura: Social Change and Formation of Medieval Age. Part I: Research History and Definition of “Kawarake”

宗基　秀明

SHUDAI Hideaki

要　旨

中世都市鎌倉の諸遺跡から出土する「かわらけ」には、古代末の土師質土器の系譜を引くと思われるロクロ成形のものと、京都から伝播したと考えられている手づくね成形の２系統がある。その「かわらけ」をめぐっては編年案が複数提示されているが、それぞれにロクロ成形「かわらけ」の成立と手づくねの導入年代が異なり、またその変遷の画期についても若干の異同がある。本稿では中世鎌倉出土「かわらけ」の編年とともに、「かわらけ」の名称に込められた非日常性について京都や平泉出土「かわらけ」との比較から探り、その背景にある中世社会の推移について考察することを目的とする。そのため、鎌倉をはじめ京都と平泉での研究史から論点を導き出した。今回は、土師質土器系譜の「かわらけ」と以後の「かわらけ」をどのように見極めるべきか、そして京都からの手づくね「かわらけ」の導入背景の考察にあたっては、受け入れ側の意図、すなわち京都「かわらけ」のどの部分を重要視したのかという認知論的視点が必要であるとの見解にいたった。こうした視点をもとに、次回は編年を組み立てながら考察を進めることとする。

キーワード：中世　鎌倉　かわらけ　中世土師器　研究史　編年　認知

はじめに

「かわらけ」という考古学用語は、おもに東日本の中世遺跡から出土する素焼の皿・坏に対して用いられることが多い。この時期のとくに京都をはじめとする畿内から西日本では同様の土器を「土師器」もしくは「土師器皿」とよぶ。また、成形技法にも大きく二通りあり、京都およびその周辺で製作される「土師器」は粘土板結合法による手づくねであり、畿内以外の西日本と東日本では回転力を利用した粘土紐積み上げ法を基本とし、粘土板結合法の手づくねによる「京都系」の「かわらけ」を併用する時期がある。

「かわらけ」、「土師器」や「京都系」などの用語は地域的特色をもって、研究者ごとに異なって用いられているのが現状である。さらには古代の平安京から中世以降には京都と呼称される地域を発信源として各地にもたらされた京都系「かわらけ」、つまり手づくねの「土師器」の導入時期をめぐって、東日本の「かわらけ」編年観に異同が生じている。近年そうした東日本、とみに東国への京都系「かわらけ」の導入時期をめぐって従来の研究とは異なる年代が提唱されているのを目にした。くわえて、そこで語られている「一括遺物」、「共伴遺物」という用語とその意味するところ、そしてそれら遺物群の資料操作に違和感を抱いた。そうした違和感に対して、筆者なりの理解を記しておこうと思い筆を執った次第である。

以下では、東日本にあって早くに京都系手づくね「かわらけ」を導入した平泉での状況も参考にしながら鎌倉を中心とした研究史を振り返った上で、上に記した視点について筆者の理解を述べ、それらを基に次号でかつて筆者が示した「かわらけ」の編年案について修正を加えて再論したい。

なお、本稿で用いる東日本は、歴史用語の鈴鹿もしくは不破関より東の東国や、足柄峠の東を指す坂東と異なり、遠江辺りから陸奥までを想定している。西日本のような土器椀と土器皿の併用が見られない東日本では、土器皿が中世の特徴的土器として取り上げられ、また在地性の強い土器皿は編年の軸となるべきこと、さらに大量に廃棄されて発見される様は、以下でみるように中世社会を探る重要資料と見なされている。また、これまでの調査研究では工人集団による「かわらけ」の形状の差異も指摘されている。これらについて

も範型を導き出して、型式の認定を行ないたい。また、南関東および伊豆地方では武家政権の樹立という政治史的転換が明瞭なために、時代区分論がそうした状況に引きずられがちであった。時代区分についても、編年作業を行なう過程で考えてみたい。

鎌倉出土「かわらけ」の研究史

鎌倉の「かわらけ」編年研究は、斎木秀雄を中心として本格的に始まった。その後 1980 年代中ごろ以降に陸続と論考を発表した服部実喜によって深められていったが、残念ながら志し半ばで夭折されてしまった。鎌倉の考古学研究と土器の研究史については、[松吉 2012]、[永田 2014]、[松吉・押木 2017] が既に論じているが、鎌倉の研究動向に重心を置きすぎていることもあり、ここでは [松吉 2016] に導かれながら、若干の補足を加えて今後の鎌倉、ひいては東日本における「かわらけ」を資料として歴史研究を行なっていくための方向性を導き出したい。なお、服部から切り貼り論考と揶揄されるかもしれないが、正確を期すために、先学による論考からの引用を多用することをお断りしておく。

鎌倉地域における体系的な考古学研究は、赤星直忠の鎌倉、横須賀を中心とした相模一帯における精力的で、そして継続的に行われた調査・研究によって始まったといってよい。氏の長年にわたる研究成果の一部をまとめた『中世考古学の研究』の「序」に次のような一文が記されている。「文献のない縄文時代・弥生時代・古墳時代の歴史は、「考古学」の方法で少しずつ明らかにされてきた。その方法で歴史時代も当然明らかになるはずである。この立場で私は中世の遺跡・遺物を調査してきた」[赤星 1980]。中世や近世にとどまらず、近代そして直近の戦跡遺跡までを対象として研究がなされている現況の考古学の礎を築いたといっても過言ではない。そうした赤星氏が、「かわらけ」の名称を明確にそして報文項目として掲げたのは、昭和 12 年であった [赤星 1937]。その後 1970 年代以降、三浦半島地域にも市街地再開発の波が押し寄せ、次第に記録保存のための事前発掘調査が始まる。鎌倉では関東大震災後の建物建て替えに伴う若宮大路周辺の調査や鶴岡八幡宮境内の再整備による発掘調査が頻発した。開発による調査件数の急増をみた 1985 年大三輪龍彦は「古代的な遺制、夾雑物がほとんど混入していない（中略）鎌倉の中世遺跡群は、我国の中世都市を解明するうえで第 1 級の物質資料群である」とし、その物質資料の年代を比定するために「鎌倉などの大消費地では、生産地の編年と別個に消費地における遺物の正しい編年がなさるべきであろう」[大三輪 1985：86] とした。そのためには在地土器の編年作業を基本として、遺物相互の共伴関係の器物のセットを導き出し、「武家好み、あるいは中世好みといったものを解明」[同上：87] することによって、中世社会とその変遷を知りうると記して、「かわらけ」編年の重要性を指摘した。

東国の武家政権の中心であり中世都市として栄えた鎌倉市街地の調査では、舶載陶磁器や国産陶器の他に「かわらけ」が大量に出土した。それら鎌倉出土の鎌倉時代の「かわらけ」の編年は、当初遺跡調査報告書において斎木を中心としては行なわれた。斎木は長勝寺遺跡と光明寺裏遺跡出土品のうち、坏と椀、皿の器形分類を敢えてせずに、製作技法と成形・整形の違いが明瞭な 5 点を選び出して、同様な「器形」を出土する他遺跡での伴出遺物（同安窯系青磁皿や渡来銭）の年代から、おおよその年代比定を行なった [斎木 1980]。現在の研究成果からみれば、それらは 13 世紀中頃から 14 世紀前半、そして戦国期の「かわらけ」であり、成形技法からすれば粘土板接合法の手づくね成形と粘土紐積み上げ法のロクロ成形の双方がある。その後、氏は鶴岡八幡宮境内の報告書において、ロクロ成形を A 類、手づくね成形を B 類としたうえで、器型を細分類し、各器型出土生活面層位との関係性に加えて鶴岡八幡宮の創建やその後の遺構変遷をからめて編年行なった [斎木 1983]。

斎木の編年作業では、京都系の手づくねが最古に位置付けられ、他のロクロ成形のおおよその年代を指摘した点で重要であったが、成形技法を基とした整形技法については体系的に論じられず、結果的に生じた形状の差をタイプとして設定したために、整形技法の変遷にもとづく型式設定に至らなかった。この点は斎木に留まらず、後の鎌倉における「かわらけ」の分類に影響を与えた。それは、後述するように京都の土師器皿や平泉での「かわらけ」研究の成果に頼りすぎていたことに起因することは否めない。また同時に、大量に出土する「かわらけ」を前にしてその使われ方に視点が引き付けられてしまったことも確かであろう。

その後、1980 年代中頃より服部実喜、河野眞知郎、馬淵和雄、宗臺秀明などがそれぞれの編年観を提示し始める。なかでも服部は平安後期以降の土師器の変遷と近世へと至る展開を視野に、積極的に「かわらけ」編年と画期設定の持論を展開した。河野も同じく広い視野のもとに中世社会の成立とそこにおける「かわらけ」を論じたが、「薄手丸深」なるタイプ設定に顕著に見られるように自らが描く見通しを著書・論文等の中で論理的に展開せず、「かわらけ」の器型変化と社会変容との関係性を明確に提示しなかった [1)]。

松吉が指摘するように、鎌倉での「かわらけ」研究と編年において、胎土や焼成、それに成形技法に関し

ては比較的細かく論じられ、内外面の拓本提示も行なわれてきたが、「器形・法量・胎土・焼成の変化、製作技法（成形・整形）変化からみる系譜や生産体制について」、体系的に論じようとする視点が欠けていた［松吉 2012：45］。しかしながら、早くからこれらの視点を取り入れ、また平安時代からの連続性を視野に入れて「かわらけ」を食器構成の一つとして体系的に捉えようとしていたのが、服部実喜である[2)]。

服部編年案

服部は斎木の編年案を前提として、自らが調査した遺跡地点の出土例をもって器形変遷を追った。まず、成形技法をロクロ成形と内型成形の2類に分け、さらに器形それらを4群に分類した［服部 1984］。そこでは、「平安時代末期の土師質土器の系統の中で評価することが可能」で、「とりわけ体部内外面に顕著に残るロクロ痕は、土師質土器からの直接的な系譜を示す」［服部 1984：185］ロクロ成形「かわらけ」を中世Ⅰ期に比定し、Ⅰ期後半段階に内型成形のものが現れるとした。そして、ロクロと内型成形技法の差から生まれた形態の差が「機能・用途の差として認識することが可能」としつつも、「製作集団の違いなどいくつかの背景を想定することが可能」として、器形が用途・使用法と工人集団の相違であるのか判じがたいとしていた。他方、整形技法に注目して「ロクロ成形のかわらけに認められる内外面横ナデおよび内面見込みの横方向ナデなどの整形技法の確立や法量の大型化は、結果的に内型成形かわらけがもつ諸属性に近い」［同上：186-187］様相を確認できるⅡ期に土器皿が「中世かわらけへと転換し、ロクロ成形と内型成形の双方よりなる「かわらけ」の基本的形態構成が成立した」［同上：187］とした。その上で、Ⅰ期のロクロ成形のものについて、「12世紀初頭あるいは前半代に位置づけられる南武蔵地域の土師質土器（坏・皿）と共通する部分が多く、おそらく平安時代末期の土師質土器と直接的な系譜関係をもつものと思われる。しかし、鎌倉の第Ⅰ期のかわらけには、古代末の土器群には認められない同一形態における大・小の法量構成を有しており、また甕や高脚高台坏が欠落しているなど差異点も少なくない。したがって、現状では一型式か二型式の空白を想定しておきたい」［服部 1985：89］としている。加えて、鎌倉以外の北関東から東北南部における内型成形品の出土事例を挙げて、鎌倉での内型成形の出土が京都周辺の土師器生産の影響を前提とした模倣である一方、ミニ京都のように鎌倉が発信源となる模倣による内型成形品の地方への拡散を示唆している。

このように服部は手づくねを内型成形としながらも、成形技法に加えて整形技法に注目して京都系との関係やロクロ成形の土師質土器から「中世かわらけ」の成立を論じたものの、その「中世かわらけ」の定義づけは行なわなかった。ただし、翌年には関東地方の中世土器全般を論じるなかで、土器皿の特殊性を示唆している［服部 1986a］。氏は鎌倉以外の地域では、「土師質土器を除けば皿形態がほとんどなく、やはり日常の食器としても使用されていたと考えざるをえない。したがって、鎌倉においても、儀礼的な用途に限定せず、安価で容易に入手できる容器としてさまざまな使用形態があったことも考慮すべきある」［同上：384］としながら、関東地方における中世土器群のおおきな特徴は「在地の土器生産、とくに土師器系の土器生産が食膳具のうち皿の生産に終始し、食膳具でも椀や煮炊具を基本的に欠如したまま展開したことも関東地方のおおきな特徴の一つで（中略）関東地方では土師器系の土器生産も日常生活用品の主たる需要をみたすものではなかった」［同上：389-391］とする。すなわち、「かわらけ」を日常容器に限定することはできず、それよりも中世食器構成において異常な存在であるとする。

こうした関東における素焼土器の特異さは、古代末の土器変遷の中で醸成されたと考え、「古代末期の土器様相は、一般的に生産器種の集約化や成形・整形技法の簡略化、さらに器形の小型化といった動きをとおして把握される（中略）。畿内や北陸地方ではその後、土師器をふくむ窯業製品の役割分担が明確化するとともに器種別の専業生産が展開するが、関東地方では残念ながらその後の動きを追うことができない。（中略）ロクロ土師器の椀と小皿に集約される11世紀後半以降、（中略）関東地方をふくむ東国においてなぜ在地の土器生産が急速に解体されるのか、または皿という特定器種のみの生産に集約されたのかという点については、現状では不明の部分が多」［同上：391］いとしながらも、翌々年には平安時代後半期の関東地方西部の土器様相を論じ、中世土器成立への見通しを示した［服部 1988］。

9世紀の後半にロクロ土師器が出現し、10世紀に入ると須恵器が次第に衰退して土師器の脚高高台椀が現れるなか10世紀後半にはほとんどの須恵器が酸化遠焼成に転換することによって須恵器生産の実質的終焉を迎え、供膳具の主体は坏と椀形態の土師器やロクロ土師器が占める。11世紀前半には土器の大半がロクロ土師器となり、皿形態が増加する。これ以降は遺跡数が激減して近年になるまで、11世紀後半から12世紀前半の関東地方の姿を想定しづらい時期となるが、黒色土器の消失とロクロ土師器の椀・皿に限定された土器器種構成となる[3)]。こうした平安時代後半期の土器変遷から、服部は10世紀前半代までに「「官」の供膳を象徴する杯B、杯蓋といった器種の消滅を合わせ

て考えるならば、その背景に「律令制」の変質とこれにともなう土器生産体制の変化を推測することが許されよう」［服部 1988：172-173］とし、これ以降に「増加した土師器は、器形と整形技術の点で前段階までの斉一性（南武蔵型や相模型といった）を失い、小地域あるいは遺跡を単位として多様化」［同上：174］した後に、11 世紀前半にはロクロ土師器の増加に伴って、土器様相が急速に斉一化する。とくに椀と坏における法量分化はその特徴のひとつであるとした。また、須恵器の衰退後に現れる黒色土器が畿内での黒色土器椀と異なり出土量の少ないことも関東地方におけるこの時期の特徴でもある。11 世紀の後半段階のロクロ土師器の皿形態における増加は大小の法量分化を伴うとともに、前代の黒色土器の少なさと同様に土器椀の相対的な減少が印象づけられるとする。服部は、関東を見渡した中世土器の様相、そして古代末の土器変遷の状況を踏まえ、改めて中世の食器全体の中で「かわらけ」の変遷とその性格を追うことになる。

服部はそれまで「かわらけ」としていた中世土器皿を京都で開催された中世土器研究会での発表時に「中世土師質土器」［服部 1985］と表記し、［服部 1986a］で「土師質土器」として以降、一貫して「土師質土器」を用いることになる［服部 1992、1994、1995、1996］。ただし、括弧付きでときに「かわらけ」を用いてもいるが、用語変更の理由を記していない。

11 世紀末から 12 世紀前半の土器様相は［服部 1984］で不明のままとされたが、主に鎌倉市内の調査成果を加味して後に公表された論考で論議している。とくに「かわらけ」については、胎土や法量の他に、内底面の調整の有無とナデの種類、体部横ナデの状態、底部糸切りの場合は糸切り痕の間隔や回転の速さと糸抜けの方向といった成形と整形の痕跡を細かく記述しながら、「かわらけ」の分類を行なっている。分類は［服部 1985］とほぼ変更がなく、底部糸切りをⅠ群、手づくねをⅡ群として、新資料によってⅠ群を鎌倉幕府以前に遡らせた。編年にあたっては、従来から用いられた層位を基本としながらも、一括資料の伴出・共伴資料も用いて行われている。結論としては 11 世紀中頃の食膳具の器種構成単純化と施釉陶器の減少を画期とした変化の延長上に中国陶磁器の増加と木器・漆器の普及に伴う土器食膳具、とくに椀形態の消失を背景として皿形態として特化した土器皿が 12 世紀中頃を画期として現れたとする[4]。

食器様相からみた中世最古のⅠ期は、前後半段階に分けられるが、底部糸切りのⅠ群のみの時期とされる［服部 1992］。前半には内底面無調整で高台状に分厚く切り残された底部をもつⅠ群のみで、体部は直線的に開き器高の高い坏形（1 類）を呈する。法量は口径 15 ㎝の大型と口径 9 ㎝と 7 ～ 8 ㎝の 2 法量の小型より構成されるとする。小型の 2 法量は多摩ニュータウン遺跡群 No.692 遺跡 1 号段切り遺構下層の出土例だが、口径の大きな小型品は器高も高いため、小型品の坏形と皿形と捉えられるかもしれない。器種構成の単純化傾向のなかにあって、小型の坏形そのものが「平安時代後半期からの土師質土器の系譜の延長上」にあると指摘する［同上：160］。伴出した山茶碗は、第Ⅱ段階第 4 型式であり、12 世紀第 2 四半期から第 3 四半期の間とされ、生産地年代をそのまま与えれば、12 世紀中頃となる。

後半段階に入り坏形が口径 13 ～ 14 ㎝の大型品と口径 8 ～ 9 ㎝の小型品の大小 2 法量となる。加えて、皿形（2 類）が現れて内湾ぎみに開く口径 15 ㎝のもの（a）と外反ぎみに開く口径 14 ㎝（b）の 2 つの器型が現れるとする。後者の 2 類 b はおそらく前半段階の 1 類から 2 類への過渡的形態と捉えられよう。

第Ⅱ期は a ～ c の 3 段階で把握され、Ⅱ群の手づくねの出現をもって特徴づけられる。a 段階のⅡ群は口径 14.5 ～ 15.5 ㎝の大型と口径 9 ～ 10 ㎝の小型からなる。いずれも器壁が薄く、器高の低い平底状が主体で、「体部外面に明瞭な稜を残し体部が内湾ぎみに立ち上がるものと稜が弱く口唇部を面取するもの、または上方に摘み上げるものがある」［同上：158］とする。京都の J タイプを想定している[5]。他方、Ⅰ群は皿形の 2 類が増加し、坏形の 1 類とともに内面調整が施される。

b 段階にⅠ・Ⅱ群ともに小型化し、とくにⅡ群土器では「大型品は（中略）全体にやや小振りとなり（中略）、体部外面の横ナデの範囲が次第に広くなる。全体に厚手で体部が外反ぎみに開き口唇端部が丸いものや明瞭な稜をもつが全体に厚手で器高が高く丸底のものなど（中略）小型品も大型品と同様に器高が高くなるとともに厚手化し、丸底で器高の高い器形も出現する」［同上：158-159］。c 段階に「Ⅰ群は 2 類が量的に卓越し主体を占める。1 類は口径が 13 ㎝前後と更に小振りになる。2 類は器壁が全体に厚手で口唇端部の丸いものが多く、器形は体部の丸みが強いものと底径が大きく体部が直線的に開く 2 器型が見られる。Ⅱ群の大型品は全体に器壁が厚手となり、器形も体部が外反ぎみに開き口縁端部の丸いもの（3）や器高が高く丸底のもの（4）などが主体を占める」［同上：159］。

このⅡ期での展開を服部は、「Ⅱ群は周知のように 12 世紀中葉～後半に広く東国一帯から北陸地域にかけて出現するといわれる京都系土師器であるが、当該地域ではやや後出し鎌倉幕府成立直後の 12 世紀末から 13 世紀のごく初頭に出現したものと考えられる。初期のものは京都の土師器に近い法量や器形をもち内

面調整（内底面の横ナデ → 内面外周ナデ）も一致することから、京都からの強い影響のもとに出現したと推測されるが、その後は器壁の厚手化や丸底化など独自の変遷をたどる。一方、Ⅱa期に始まるⅠ群の内面調整（内面外周 → 内底面の横ナデ）は、当該期以降の土師質土器に一貫してみられる基本的な成形技法である。（中略）この段階において始めて古代的な属性が払拭され、いわば「かわらけ」と呼ぶにふさわしい中世土器に転換したものと思われる」として、東国の「かわらけ」の規定を行なっている（傍点は筆者による）。さらに「（Ⅰ群の）内面調整がⅡ群（京都系土師器）の出現と相前後して始まることから、その影響下に開始された可能性が高い。更にいえば内面調整がまず皿形の2類に現れ、ついで杯形の1類に及ぶことから、Ⅱa期における皿形器形（2類）の定型・定量化がⅡ群の出現を契機になされた可能性もあることを指摘」している［同上：160］（カッコ内は筆者による）。すなわち、服部にとっては、Ⅱ群京都系土師器皿の影響を受けて、「かわらけ」が成立したと考えていることになる。その前提として古代末以来の土器器種構成の単純化を見ているにしても、手づくねの整形技法の導入をもって「かわらけ」、服部の用語では「土師質土器」が始まるとみているのだが、氏の［1986a］における土製供膳具の異常さを示唆する論調としっくりしない感が残る。

上のように12世紀末に鎌倉または相模南部に「かわらけ」の成立をみる服部だが、その年代比定にあたって、注意すべき記述がある。年代設定については、次号でまとめて論述するが、敢えて本節で記しておく。服部は上に見たような鎌倉でのロクロ成形を基軸として手づくね成形が加わるとした土師質土器（「かわらけ」）の展開を当時の新資料をもとに想定し、その年代を求めるにあたって、「かわらけ」に伴出した国内産陶器や中国製陶磁器、とくに青磁と白磁の出土比率とその類型を示した。「九州や平安京（京都）とさほどの時間差をもたずに搬入されたものと考えられる。ただし、Ⅱc期は大宰府で多数を占める龍泉窯系青磁椀Ⅰ−5類の比率が低く、依然として龍泉窯系青磁椀Ⅰ−2・4類と同安窯系青磁椀・皿Ⅰ類を中核とした組成をもつ（中略）。この相違が搬入時期の違いを反映したものか、あるいは在地土器編年の問題によるものかは再検討を要する」［同上：163］としている。同様な指摘、または編年観が間違っているのではないかとの見解を西日本、とくに九州の陶磁器研究者から度々口頭で指摘された覚えが筆者にはある。しかし、この12世紀末に限らず鎌倉の青磁好み、とくに碗形態における青磁好みは13，14世紀にまで続くものであり、伴出する舶載陶磁器分類の他地域との比較のみから年代を判断するのは危険ではないだろうか。時期や編年の問題でなく、考古学が人々の歴史を語る学問であろうとする時に考古学資料の事象理解にあたって全てを同一平面で捉え解釈するのではなく、日本列島の地域文化による取捨選択にも目を向ける必要があろう。当然、その背景として、政治経済の状況を踏まえたうえであることは言うまでもない。

さて、話を戻そう。服部は［1994］年の論考で前稿に続く13世紀中ごろ以降の「かわらけ」の展開を食器構成全体の中で論じている。「外底部に指頭圧痕を残すⅡ群土器の衰退、底部糸切りのⅠ群土器では体部の丸みが強い薄手の一群の卓越という二つの顕著な変化をみることができる。Ⅱ群土器は（中略）京都との器形の近似は第Ⅱ期（12世紀末〜13世紀前半）のごく初期のみで、その後は丸底化、器壁の厚手化など独自の変化をとげ在地土器化したと考えられる」［同上：120］とする。他方、「薄手の一群は第Ⅳ期に杯形土器（1類）の中に顕在化する。第Ⅳ期（13世紀末〜14世紀前半）後半には杯形土器が主体となり、同時に皿形土器（2類）の中にも顕在化しはじめる。そしてⅤ期（14世紀後半）には杯形、皿形土器の主体を占めるという変化をたどっている。当該期のⅠ群の土器にみられる一連の変化は器壁の薄手化ともいえるが、この変化は南武蔵、相模地域のほぼ全域に認められるものであり、大河内勉氏が指摘するように漆器の器壁変化に伴うものであったと思われる［大河内1993］。しかし、それらが出現期の第Ⅳ期から大中小の3法量を確立していること、また厚手の一群とは胎土や器形が異なる点からみて、第Ⅲ期（13世紀後半）からの時期的な型式変化ではなく、厚手の一群とは異なる生産集団から供給された製品であった可能性が高い」［服部1994：120-122］（カッコ内は筆者による）とする。13世紀中ごろ以降に「かわらけ」は手づくねの衰退とロクロ成形の器壁の薄手化、そして法量の3分化を特徴とするとする。この見解は後述の河野や馬淵、宗墓の「かわらけ」編年の推移と一致するものであるが、年代については後述するようにそれぞれで若干異なる。しかし、このロクロ成形に現れた薄手化のなかで、それを主導した製作者集団が従来のものを製作していた集団と異なるのではないかとの指摘は重要であり、胎土や製作手法、焼成における変化・変容も視野の中に入れた言及である[6]。

こうしたロクロ成形品の変容とともに先の手づくね製品の衰退原因は不詳としながらも、「第Ⅳ期には京都でもⅡ群土器の原型とされる深草産の褐色系土師器が衰退し、これに代わって嵯峨産の白色系土師器が上げ底状の器形を持ついわゆるヘソ皿とともに卓越するという大きな変化が生じている［鋤柄1998］。白色

系土師器は13世紀前半代に杯形土器として出現する。その後、この土器は嵯峨の地で内型成形の定着や法量規格の確立をみて型式として成立し、14世紀代に入ると生産（供給）量が急速に増加していくが、出現当初は宮廷との結びつきが強く、その用途は大饗をはじめとする宮廷儀式の器物などにほぼ限定されていたといわれている［鋤柄1998］」［服部1994：120］と指摘して、鎌倉での手づくねの変容が京都での「土師器」の推移と何らかの関係性をもっていたことを想定している[7]。同時に、こうした変容の要因として、政治的背景をも想定し、「この時期は宗尊親王が建長四年４月に第六代将軍として鎌倉に下向し、これに伴って番役や儀礼が再整備された時期でもあり、Ⅱ群土器の衰退は先にみた京都の動向と無関係ではなかったと思われる」［服部1994：120］とする。言い換えるならば、京都での儀礼の変化に伴ってⅡ群土器は京都系土師器としての使命を終え、その後は白色系土師器あるいは瓦器と白色系土師器がその役割を担ったと考えることも可能であろう。

結論として、服部は「13世紀後半から14世紀前半は前段階に確立した食器様式が質的、量的に進展したものとみることができる」［同上：122］とする。

以後、［1995、1996］の中世後期の展開へと論を進めるが、本稿での主な対象時期からははずれるので、必要に応じて触れることとする。

服部の一連の論考は、1984年から1996年にかけて発表され、後に中世後期の編年観の見直しを行なっているが［服部2002］、この間に河野、馬淵や宗臺による鎌倉、または相模や南関東の「かわらけ」、土師質土器に関する見解が発表され、服部論考をふくめて互いに分類と変遷観の相違を明確にしていく。

河野編年案

河野の論考は「かわらけ」を単独で論じることがなく、「かわらけ」をふくめた中世土器総体を見わたして中世社会を語ろうとする姿勢が特徴で、［1981、1982a、1982b、1983］と鎌倉市内諸遺跡出土の白かわらけ、瓦器椀・皿、瓦器まね土器、瀬戸内系土師質土器（早島式土器）などを論じているのもその一端を示している。こうした研究姿勢を下地として1986年に神奈川考古同人会による「シンポジウム古代末期～中世における在地系土器の諸問題」にて鎌倉地域から出土する中世土器全体像のなかでの「かわらけ」を論じた［河野1986a・b］。その論考において、河野が一貫して堅持した中世土器、ひいては中世陶磁器をふくめた器の社会における位置付け、現在の研究者がそれらに向きあうべき姿勢についての持論を述べている。「中世土器を「編年」するという作業にかかるには、古代までの考古学とはいささか頭の切り替えを要求される。すなわち、陶器、磁器、漆器、土器などの間で機能分担が行なわれており、また同一機能に対して複数の種類の器が混用されることもあって、土器が遺物編年の主導的指標たりえないかもしれないということである。（中略）上記のような状況を頭に置くならば、中世土器は器種構成やセット論で理解すべきでなく、生産者の別とその集団の系統と、器形や製作技法の変化をからませてとらえるべきであろう。そうすると、中世土器のうち、皿形のもののみを（稀に異形品を作るとしても）生産していた集団の製品が、まさに「かわらけ」として理解できるのである。逆に言えば、かわらけとは大小（まれに大中小）の別ある素焼の皿であって、ごくまれに異形の品が同質の胎土・焼成を示すとき、それを「かわらけ質」土製品を称しうる」[8]［河野1986a：192］（傍点は筆者による）とした中世の土器陶磁器に対する見解は今も色褪せることのない視点である。ここまでに記した、そして以降に記す筆者の土器編年に対する立脚点もここにある。

さて上掲のシンポジウムで示されたように、東国古代末期の土器はロクロ土師器が坏と椀に器種限定され、それらが皿と脚高高台椀に推移するとの把握を前提に、やがて中世の「かわらけ」に引き継がれて行くであろうとの見通しのなかで述べられた器種構成やセット論ではないとした河野の理解は、首肯けるものであろうし、製作技法の相違や変化のなかに製作集団をとらえることを主眼に置いている。ただし、その製作技法については「鎌倉の糸切り底のかわらけは、初期には細砂～中砂を多く含み焼きも固いが、内底調整が定着する頃には胎土が細かくなってきて、14世紀後半以降は粉っぽい胎土になる。器形や法量の他に、細部調整や胎土・焼成など、土器の“顔”をつかんでおかないと、実測図だけで編年はできないのではないかと思う」［同上：193］と述べるように、製作技法に注目するもののその細部に触れることなく、後に至るまで氏の感覚的な把握の論述に留まるところが多々見られるのも確かである。実際に鎌倉で調査に携わる限りでは、氏の抱く「かわらけ」各器型のイメージを共有できるのだが、それを外に発進する際にはより客観的記述が求められる。いわゆる「薄手丸深」器型はその典型であろう[9]。

「かわらけ」の性格についても述べている。「それは供膳機能のみをもたらすものではなく灯明皿にも使用されるし、墨書を加えて呪物にもなる。また供膳機能とても、宗教的行事や会食など非日常的機会に、多量に消費されるという側面を見逃せない。（中略）こうしたことは土器論の中では消費者側の行為ということで見過ごされやすいが、実はそういった消費のさまざ

まな様態を見越して、それに量的に対応し、素焼で未使用という清浄さを維持する保守的な生産体制があったことを考えねばなるまい。かわらけが必要とされる機会が多くあるところには多く供給され、必要のないところでは少量を搬入するにすぎないということである」［同上：192-193］（傍点は筆者による）。すなわち、日常の必需生活容器ではなかったとする。

また、「かわらけ」の性格を論じるにあたって、「なぜ在地のものがあるのに手づくねのものを採用するのかという疑問に答える必要がある」［同上：193］と指摘するように、東日本の中世諸遺跡から出土する手づくね「かわらけ」の存在理由がロクロ「かわらけ」が現れ、または古代末からの土師器の変容と器種の減少、限定のなかでなぜ「かわらけ」が素焼土器として皿形態に限定されていったのかを解明し、さらに「かわらけ」の機能を探る手がかりであることを指している。河野はそれを「手づくねであるとか白いとかいうことが、京の文化にコミットするためのキーポイントではないかとさえ思わせる」［同上：193］とする。

以上のような理解をもとに、河野は以下のような編年を組み立て、その暦年代観を示している。編年の大きな特徴は、12 世紀後半から末とする土器皿を土師質土器の系譜を引くものとし、後の「かわらけ」と一線を画して把握している点である[10)]。また、年代を設定するにあたって、「かわらけ」に伴って出土する陶磁器について「「大体同時期に存在したであろう」という程度のことで、考古学者がよく云うところの確実な「共伴関係」ではない。そもそも土壙内一括資料などといってみても、土壙を埋める土の中ですでに前代の陶磁片が入っていないという保証はないし、使われ方の異なる土器や陶磁器が一緒に廃棄されるチャンスは、そう期待できるものではない」と述べ、8 期に分けられた時期別の土器と陶磁器の同時性は「大体」、おおまかに見てとのことであり、また「共伴」や「一括資料」を厳密に判断する必要性を説いている。

さて、8 期に分けられた最古の鎌倉第Ⅰ期では、すでに服部の編年でもみた鶴岡八幡宮国宝館収蔵庫用地と千葉地東遺跡資料を上げ、「この段階で器形は大小の形をとり、大皿は口径 14 ㎝余で器高やや高めである。小皿は 8 ～ 9 ㎝の口径で、底部が厚く切り離されている」［河野 1986a：193］。「土師質土器の系譜を引くものと思われ、内底無調整である。胎土は砂が多く、焼成は良好で硬い。外側面のロクロ目は強い。糸切りの糸目が粗く、大皿は深い形」［同上：196］とするが、「この最初期のタイプは他の初期かわらけと系譜的につながるかどうか、よくわからない」［同上：195］。「他の初期かわらけとしたものには大きく二群あり、一つは浅い器形で分厚く、口縁があまり内湾しない大小の皿である。胎土は砂が多く橙色で硬い。もう一群はやはり浅い器形だが、外面の丸みが強く、底部が突出するように厚く切り残される一群である」［同上：195］。この二群については［服部 1992］でⅠ期後半のものとして認めることができる器型で前者は後者への過渡的形態とみなした。12 世紀末としている。

鎌倉第Ⅱ期に手づくねが現れるとして、「二種あり、古手と考えられるものは器壁やや薄く、胎土が砂っぽく、外面の稜が鋭く、口唇部が縁帯状になる。底部疑似平底状」［同上：196］のいわゆる J タイプである。「これと共に出る糸切り底のものには、器高低く底径の大きな皿と、外面に強い丸みをもち底部の厚い皿とがある」［同上：196］。13 世紀前半代とする。

鎌倉第Ⅲ期には、「手づくねかわらけは胎土の砂が減り、稜も弱くなって口唇部が丸みをもって終わるようになる。全体に厚ぼったくなり、底部は丸みが出る。糸切り底のかわらけも胎土が粉っぽくなり、焼きも甘くなる。底径は依然大きいが、全体に小型化し、大皿の口径 13 ㎝前後となる。（中略）白かわらけが確実に存在している」［同上：196］。13 世紀中葉～後半を考えている。

鎌倉第Ⅳ期は、「手づくねのものは姿を消し、糸切り底で側面に丸みを持つ、厚手でやや浅いものが大多数を占める。底径は前代より小さめとなり、口径は大皿が 13 ㎝、小皿が 8 ㎝あたりにまとまる」［同上：196］。「白かわらけは手づくね生産を維持しているが、ある程度糸切りへの転換が進んでいる」［同上：197］として、前代での手づくねの鎌倉における変容と「白かわらけ」の在地化が進められている様子を指摘している。いわば手づくねの鎌倉での消化吸収がほぼ終了した様子が示される表現である。また、年代を 13 世紀末～ 14 世紀前葉におくが、「内容の豊富さからすれば細分したいところだが、遺跡の層位はそれを許さない状況である」［同上：197］とする。

鎌倉第Ⅴ期の「かわらけの特徴は、深い器形で薄く、側面がきれいな丸みを持つものが発達することである。一括資料を見ると前代にその傾向は始まっている。この薄手のものは、口径が 13 ～ 14 ㎝の大型、10 ～ 11 ㎝の中型、6 ～ 7 ㎝の小型と、大中小のとりあわせになる。一方で、厚手の浅い器形のものも残るが、側面の上方から 1/3 くらいのところにわずかな屈曲をもち、見た目に背が高いように感じられる」［同上：197］。「白かわらけは糸切り底に転換するものの、量は激減する」［同上：197］。いわゆる「薄手丸深」の出現であり、同時に「白かわらけ」が在地化するとともにその存在感を低下させ、京都系土器の存在の必要性が消滅していることを示している。14 世紀中葉～終末、あるいは 15 世紀初頭ではないかとする。

鎌倉第Ⅵ期には、「薄手丸深」が消え、器高の低い皿形の口縁が外反傾向を持つようになる。

鎌倉第Ⅶ期以降については、服部の論考を取り上げた際と同様に本稿では省略するが、「かわらけ」が強い外反を示すいわゆる戦国タイプとされるものである。以上の編年の暦年代については、同シンポジウムにて短く論じているが、基本は伴出する陶磁器を参考にすると同時に紀年銘資料も挙げている。しかしながら、鎌倉市内の調査で発見される紀年銘資料はほぼないといってよく、人名から推定される年代の他に多宝寺跡に残される「覚賢塔」台座に納められた銅製蔵骨器の銘文が数少ない暦年代を伝えている。その「覚賢塔」台座の下からは2点の「かわらけ」が出土しているが、実物を確認できず、河野自身の記憶から鎌倉第Ⅳ期に当たるだろうとしている。

全体を通じて、河野の論考より遅れる［服部 1992］は、河野論考をある程度下敷きにしていることは明瞭であるが、手づくね成形品の衰退要因については、京都での土師器の推移の影響を想定する服部に対して、鎌倉での「白かわらけ」の推移にも目配せしている河野は受け手であった鎌倉の主体性により重きをおいた解釈であると読み取れる。薄手化については服部が木器の模倣を前提に新たな製作集団の台頭を想定している。河野も、その系譜図を見るならば、13世紀初頭以降の鎌倉「かわらけ」の系統とは異なる瀬戸内系土師質土器や瓦器、瓦質土器などの影響を受けて器高の高い、そして薄い器壁の「薄手丸深」の登場を想定しているようである［河野 1986a：195の挿図］。そのあたりの状況を次のように記している。「（第Ⅰ期後半の初期かわらけの二群は）ほぼ一系に編成されるらしく、13世紀に一般的な器形は側面に丸みを持つ厚手のもので、胎土は砂が減り焼成も甘くなる。一方内底調整は全ての個体に及ぶ。これが鎌倉に一般的となり、大量生産されると保守的になるのか、その後大きな器形変化をしばらくおこさない。大きな流れとしては、糸切りの底径が広いものから小さくなる傾向は認められる。しかしその後の変化を内包するのか、少個体数の資料では差がひどく見えるほどの個体差がある。」

「かわらけが変化をおこすのは14世紀の中頃を中心としてである。それは二極分解とも云えるようなもので、一つの動きは厚手で浅い器形のものの側面上部に弱い屈曲が見られるようになり、（中略）一方の動きは口径の縮小と器高の増大、器壁が薄くなる傾向である。（中略）二系に分離したものが、16世紀代のどこかで（あるいは15世紀後半か）再統合されるのか、戦国期にはほぼ均一な内容が見られるようになる」［同上：195-196］（カッコ内は筆者による）。すなわち、薄手化の要因はつまびらかにしないものの、鎌倉での「かわらけ」製作が14世紀中頃（あくまでの河野 1986a 論考において）に大きな変容・変化を起すことを述べているのみである。しかし、すでにみた手づくねと「白かわらけ」から脱却した鎌倉でなぜに西日本を起源とする瀬戸内系土師質土器や瓦器に影響されて「薄手丸深」器型が現れるのか疑問が残る。この疑問に対して土器をのぞいた瓦器や火鉢、土鍋などの土器類を扱った論考の中で河野はこのようにも述べている。

「平安末に土器生産の基盤も伝統も失っていた場所に、急に多くの軍事的・政治的人口を抱え込んだのだから、土器にしろ手工芸にしろ搬入するか移入するしかなかったはずである。（中略）それゆえにやや混乱したとも言える土器の搬入あるいは模倣がおきたのではないだろうか。伝統なしの速すぎた商業主義といえるかもしれない（あまりに気分的な表現だが、、、）。」

「多彩な搬入品といったが、その大部分は畿内西国に起源をもつものであるのも、鎌倉の特色といえよう。関東武士に基盤をおく鎌倉政権のお膝下に、なぜ関東各地の在地産品が集らないのかは、早くから疑問とされる所であった。（中略）地方の開発領主たちにとって、わざわざお勤めに行くならそこは“みやこ”であってほしかったはずである。（中略）そこは“第二の京都”であるべきものなのだ。そう考えると鎌倉の土器が「西向き」であることも理解できよう」（［河野 1992：163］。引用文中にもあるように、実証的でない気分的な文章である。しかしながら、河野が抱く中世都市鎌倉の様子を描きたかったのであろうし、またその中で「薄手丸深」の出現背景もみているのである。さらには、鎌倉、もしくは鎌倉のある相模南東部での古代の土器の生産伝統を全く失ったとは言い切れないものの、土器生産が貢納と流通の二面性をもっていた中世京都や畿内での状況をそのまま敷衍することもできないことは確かである［脇田 1986、1997；橋本 2015；鋤柄 1998］。

いずれにしても、河野は「かわらけ」を素焼土器であり、大小の法量を持つものとし、最初期の例はロクロ目が強く坏形をした古代末「土師質土器」の系譜を引くものととらえており、後出の内底面にナデがほどこされた皿形のものとの系譜関係を留保している。文脈からは内底面にナデのあるもの以降を「かわらけ」としていると読み取れる。

服部、河野による編年は発表年代に起因する資料の影響もあるが、河野のものがやや幅をもったものとなっていたが、Ⅰ期の扱いは古代末の土師質土器の系譜を引くとして同様な理解を示している。服部はⅠ期から以後も土師質土器の名称を用いながらもつぎのⅡ期において「古代的な属性が払拭され」たとする。他

方、河野もⅠ期の「かわらけ」に「土師質土器の系譜を引くもの」とし「他のかわらけと系譜的につながるかどうか、よくわからない」と述べるように、以後の「かわらけ」との型式的連続性を認め難いとしている。

次にみる馬淵和雄による編年は、とくに最初期の理解と13世紀後半から14世紀にかけての展開が前二者とは異なる。馬淵は鎌倉初期から前期を中心とする資料が得られた向荏柄遺跡［馬淵1985］と大蔵幕府周辺遺跡［馬淵1993］での調査成果と出土した「かわらけ」の分類を踏まえて、そこでの伴出資料を拠り所として12世紀前葉までロクロ成形「かわらけ」の出現をさかのぼらせ、また従来の13世紀後半から14世紀の編年に対して異を唱え、中世都市鎌倉における搬入陶磁器を指標とした食器・調理具・煮炊具の変遷を提示している［馬淵1997a・b］。

馬淵編年案

［馬淵1997a］は「中世食器の地域性」を論ずる第一部の付編として掲載されたもので、鎌倉で行われてきた従来の編年案に対する異議を唱え、新たな編年案を示すために著されたものである。その論点は次のようなものである。「常滑のいわゆるN字状口縁の甕が13世紀中葉（正元元年・1259）には成立していた（中略）。鎌倉の在地系土器のみが、いわば14世紀に置き去りにされた状態になったのである。本来搬入系によって年代観が設定されたのだから、それが変われば共伴する在地系の年代観も変わらなければならない。（後略）」

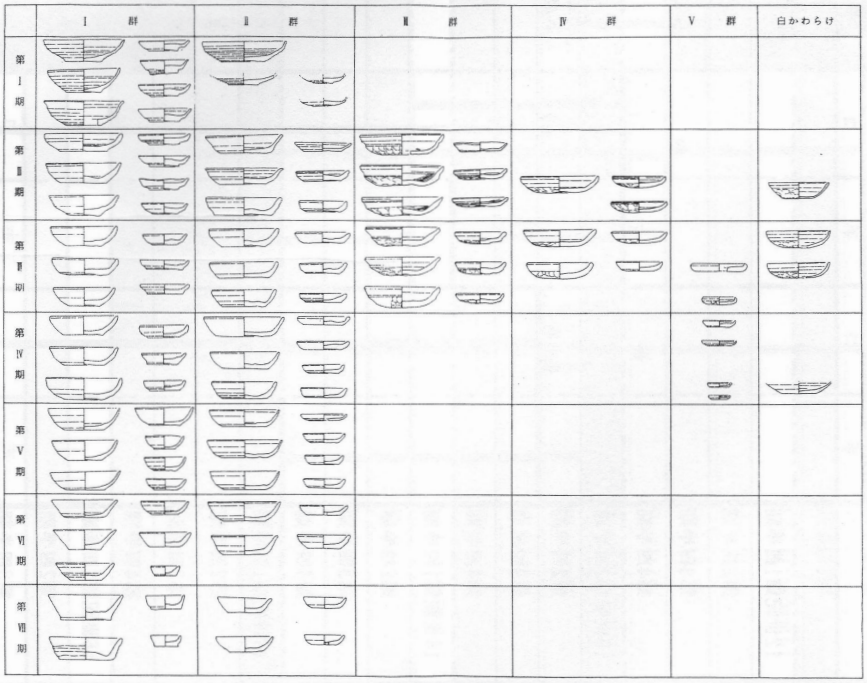
「生産地との数十年から半世紀近いずれは、ほとんどすべて「伝世」と説明されるのである。（中略）商品の流通は豊富で、したがって消費形態もより即時的であろうことにだれしも容易に気がつくはずだ」［同上：311-312］。少し解りにくい引用となったが、従来の「かわらけ」編年の根拠となった伴出遺物や遺構の年代が新しすぎるため、「かわらけ」とともに伴出する搬入品を「かわらけ」の年代に合わせて「伝世」としているとの主張である。言い換えれば、搬入品と在地産土器の年代観がずれており、搬入品の年代に従って「かわらけ」の年代観を設定しなければならないとのことである。ただし、ここで注意しなければならない点は、都市が地方よりも新しいものを求めるとは限らない。地方の方が新しもの好きである現象はしばしばみられることである。かえって、都市社会の方が伝統に固執する場合がある。このような理解に深入りすると都市論を繰り広げなければならなくなるが、何らかの中心地機能（センター機能）を備えた都市では、そのセンター機能の象徴性を示す必要がある［宗基2008, 2013］。上述の河野が鎌倉に「京都」をみたいとする意識もまたセンター機能の象徴物の維持が必要であったと言い換えることができる。言葉を変えて表せば、消費地における嗜好もあって選ぶある種の焼き物、器種、型式が長年搬入され続ける、また持続させ続けることも想定しておく必要があろう［藤澤2001：44］。

話を戻そう。耐久消費財である常滑の甕などは20～30年の使用期間を考慮すべきである一方、在地産の「かわらけ」はほぼ使い捨てであることに注意すれば、「伝世」をことさらにあげつらう必要はないのではないだろうか。藤澤は中世の古瀬戸が蔵骨器として埋納されるまでの伝世期間を多くの類例から探り、「古瀬戸前期の蔵骨器は、少なくとも半世紀から一世紀の伝世期間を想定した方が良いと思われ」［藤澤2001：24］、「常滑産の甕と瀬戸産の瓶子類では常滑甕の方がやや新しいという傾向が窺われるのである。（中略）瀬戸産の瓶子類の方が伝世期間の長いものが存在するということは、瓶子類のもつ特別の意味を考慮する必要があろう［同上：25］と述べている。20～30年どころの使用期間ではなかった可能性さえ高い。

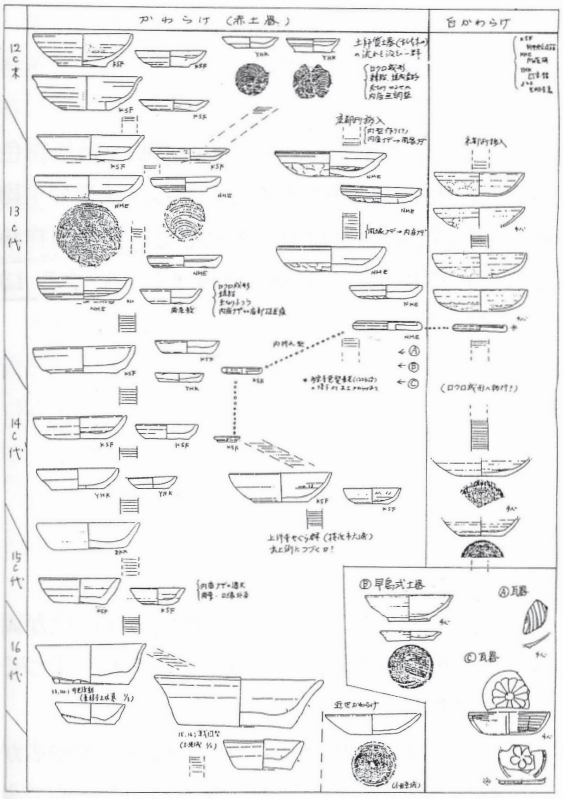
こういった伴出遺物の取り扱いには注意が必要で、これまでの記述でも共伴と伴出遺物を使い分けてきた。やや極端な表現ではあったが、河野が指摘したように狭い鎌倉の平野を開発するには頻繁に土が動かされて同一遺構内出土遺物であってもすでに埋土のなかに入っている遺物を伴出遺物としてしまう場合もある。ましてや共伴と確実にいえるのは埋納品ぐらいしかないと考えた方が無難であろう。

年代観の設定を巡る前置きが長くなってしまった。［馬淵1997a］が提示した「かわらけ」をはじめとする食器類の年代は、「土器から見た中世社会の成立」シンポジウムに寄せて提示された時期区分にしたがっているため、馬淵本人の意図に沿うものかはわらない［吉岡1991］[11]。「器種・器形・法量の単純化、技法の省力化的改良と都市域における高度の産地・器種別複合に求められる」［同上：15-16］とする中世Ⅰ期を11世紀中葉～12世紀前半として、ほぼ100年単位の表で示されているために、各時期の「かわらけ」の詳しい分類やそれぞれの整形技法は述べられていないが、表から読み取れる特徴を示す。

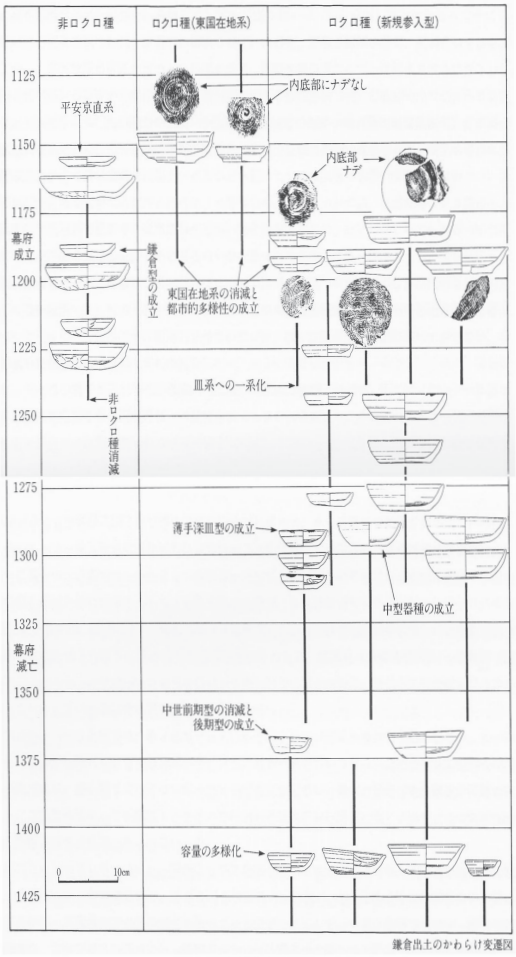
中世Ⅰ期には国宝館収蔵庫地点と若宮大路に面した北条時房・顕時邸跡のV字溝出土資料を挙げる。両者は前後関係にあり、後者が新しく手づくね「かわらけ」を出土させる。つづく中世Ⅱ期（12世紀後半～13世紀前半）にロクロ「かわらけ」の埦形がなくなり、手づくねは器壁が厚くなるとする。国産陶器では山茶碗・山皿のみで、藤澤編年の5形式と6形式の範囲におおむね含まれる。全体に量は少ないが、渥美・



服部1985



河野1986a



馬淵1998

図１　中世鎌倉「かわらけ」編年各案

湖西型が目立ち、尾張型をあるいは凌ぐとする。中世Ⅲ期（13 世紀後半～ 14 世紀前半）に手づくねが消滅する一方で、いわゆる薄手丸深が現れるとする。馬淵は本期を 3 つに細分できるとして、「Ⅲ -1 期に深めの器形が現れ、Ⅲ -2 期に薄手で内湾する椀に近い形が完成し、量的に他を圧するようになる」［馬淵 1997a：316］とする。他では藤澤編年 7 形式を中心に山茶碗の定量の出土がある。該期には北部系が目立つようになり、東遠系も散見される。中世Ⅳ期（14 世紀後半～ 15 世紀中葉）には埦形がなくなり皿形になるとともに外反傾向が見られて、器壁も厚くなるとする。

所収報告書の性格上、食器類等の全体の推移とその特徴を論じることを眼目としたために「かわらけ」だけを詳述することはかなわず、おのずと詳細な器型変遷と整形技法の観察を望むべくもない。100 年単位の変遷であることから、全体としては上にみてきた服部や河野が示した編年とそれ程大きな年代差がないようにもみえるが、他の著書に示された編年表では河野編年に比べて全体に 30 年ほど遡り、服部のものと比べても手づくねの出現をやはり 30 年ほど早く設定していることが解る［馬淵 1998：244-245］。

宗墓編年案

鎌倉市内の調査にかかわっている者の編年作業として、筆者のものを最後に掲げる。宗墓は、「薄手丸深かわらけ」の出現をメルクマールとした編年を器型分類と出土層位、そして建長寺伽藍指図[12]に照応する遺構、またその立柱年（1327 年）を暦年代比定の根拠として行なったのをはじめとして［宗墓 1992］、後にそれらの器型に伴う遺跡層位ごとの主に古瀬戸窯製品の伴出遺物と火災層の歴史記録との照応から暦年代比定の補強を試みた［宗墓 2002］。他方、鎌倉前期の編年では、源頼朝が建立した永福寺造営に伴う遺構を残す横小路周辺遺跡での遺構内伴出遺物と永福寺跡遺跡での創建期遺構出土遺物を用いて、編年と暦年代比定を行なった、さらに、13 世紀の「かわらけ」については、永福寺の 3 度にわたる建て替えに伴って廃棄された瓦を伴出する資料を用いた編年作業を行なった［宗墓・宗墓 1996；原廣志・宗墓秀明 1996］。

いずれの編年作業においてもおおまかな成形・整形技法の観察、とくに手づくね出現前後の時期では口縁部と口唇部のナデに注意を払っているものの、器型ごとの影響関係を視点とした分類にもとづいている。以下に［宗墓 1998、2002，2005］に示された編年の概要を述べる。

最古のⅠ期は土師質土器の系譜を引きずるロクロ目を強く残す砂質胎土の低速回転糸切り底のみの時期であり、千葉地東遺跡河川最下層の出土例を挙げて 1180 年頃とする。ただし、これより以前の多摩ニュータウン No.692 遺跡出土の大小の土師質土器を提示して、それらとの関連を示唆している[13]。Ⅱ期になると新たに京都系手づくね「かわらけ」が加わるのを特徴として、最も早く現れる手づくねは平底状で内底面の指頭圧痕が強い。圧痕を消すための横ナデが加えられる。服部の云う内面外周ナデである。口縁部の横ナデは二段で、口唇部の面取り後に行なわれる。また外底面にスノコ状の痕跡を残す。次に現れる手づくねはやや器高が高く、口唇部の面取り後に口縁内外面に一段の横ナデを施すために、面取り部に沈線を作る。胎土はきめの細かな粉質土で淡い灰色から橙色となる。糸切り底では内底面にもロクロ目を残し、胎土は青身の灰色を呈する。永福寺および関連遺構出土遺物からなるⅡ期は 1992 年前後とする。Ⅲ期では、手づくねの底面指頭圧痕と口縁部横ナデの間に段が見られ鎌倉および周辺での手づくねの特徴を示し始める。形状は平底化が進み、底部中央が上げ底状になる例もある。口唇の面取りの他に口縁部の横ナデは一段または 2 段である。内面外周のナデが弱くなる一方、口縁の横ナデが幅広くなり 12 世紀末の平泉で出土する例に似る。底部糸切りでは器高の低化が進み手づくねの影響と考えている。年代は永福寺創建瓦が廃棄される 12 世紀最末期から 13 世紀第 1 四半期頃とする。Ⅳ期には京都系手づくね「かわらけ」が底部糸切り「かわらけ」の器形の影響を受けて器高が高まり、外底部の指頭圧痕部と口縁の横ナデの間の段が非常に強くなる。この時期より口唇の面取りがなくなる。手づくねと底部糸切りの両者に内底面のナデと外底面のスノコ痕が確実にみられるようになり、また胎土が粉質で橙色から赤褐色へと変化する。13 世紀中頃とみる。Ⅴ期は手づくねの減少と消失の時期で、「薄手丸深」が現れ同時に中型品も初現する。年代はやはり瓦の廃棄年代をもとに 1280 年頃から 14 世紀第 1 四半期とする。このあと、「薄手丸深」型の最盛期となるⅥ期に「薄手丸深」以外にも中型が現れて、「かわらけ」に大中小の 3 器形が確立する。この時期の暦年代については、先の建長寺法塔立柱年の他に、13 世紀末に度重なる火災にあった円覚寺旧境内遺跡で発見された火災面とその出土遺物との照応から 14 世紀第 2 四半期以降であることが確実と考えている［宗墓 2002］。15 世紀初頭に「薄手丸深」の消失をもって、15 世紀のⅦ期へ展開する。

宗墓は手づくね製品を京都系と表現し、横小路周辺遺跡「溝 2 下層（Ⅱ期）と上層（Ⅲ期）出土手づくねかわらけの器形と口縁端部の面取りの所作は、中世京都の土師質土器Ⅲ Ab と Jb 器形との強い関連を想起させる（中略）が、また同時に、それらの口径は 8.5 ～ 9 ㎝と 14 ㎝内外であり、まさに 1200 年前後の古代

表１　各編年案における鎌倉出土かわらけの年代観（松吉 2016 を一部改変）

<table>
<tr><th>時期</th><th>斉木[1983]</th><th>服部[1985]</th><th>馬淵[1998]</th><th>河野[1986]</th><th>宗臺[2005]</th></tr>
<tr><td>12世紀第1四半期</td><td></td><td></td><td rowspan="2">Ⅰ期</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>第2四半期</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>第3四半期</td><td></td><td rowspan="2">Ⅰ期
（12c中頃〜末）</td><td>Ⅱ期
（1150頃〜）</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>第4四半期</td><td></td><td rowspan="3">Ⅲ期
（1175頃〜）</td><td rowspan="2">Ⅰ期
（12c末）</td><td>Ⅰ期(1180頃)
Ⅱ期(1192頃)</td></tr>
<tr><td>13世紀第1四半期</td><td rowspan="2">Ⅰ期
（1200頃）</td><td rowspan="2">Ⅱ期
（12c末〜13c前半）</td><td rowspan="2">Ⅱ期
（13c前半代）</td><td>Ⅲ期
（12c末〜13c</td></tr>
<tr><td>第2四半期</td><td rowspan="2">Ⅳ期
（13c1/4〜）</td></tr>
<tr><td>第3四半期</td><td rowspan="2">Ⅱ期
（1250頃）</td><td rowspan="2">Ⅲ期
（13c中葉〜後半）</td><td rowspan="2">Ⅳ期
（1240頃〜）</td><td rowspan="2">Ⅲ期
（13c中葉〜後半）</td></tr>
<tr><td>第4四半期</td><td rowspan="3">Ⅴ期
（1280頃〜14c 1/4）</td></tr>
<tr><td>14世紀第1四半期</td><td rowspan="3">Ⅲ期
（1300頃）</td><td rowspan="2">Ⅳ期
（13c末〜14c前半）</td><td rowspan="3">Ⅴ期
（1280頃〜）</td><td rowspan="2">Ⅳ期
（13c末〜14c前葉）</td></tr>
<tr><td>第2四半期</td><td rowspan="3">Ⅵ期
（〜14c後半）</td></tr>
<tr><td>第3四半期</td><td rowspan="3">Ⅴ期
（14c後半〜15c初頭）</td><td rowspan="3">Ⅴ期
（14c中葉〜終末
or 15c初頭）</td></tr>
<tr><td>第4四半期</td><td rowspan="2">Ⅳ期
（14c後半〜15c初頭）</td><td rowspan="2">Ⅵ期
（1360頃〜）</td><td rowspan="3">Ⅶ期
（15c前葉）</td></tr>
<tr><td>15世紀第1四半期</td><td rowspan="2">Ⅶ期
（1415頃〜）</td></tr>
<tr><td>第2四半期</td><td></td><td rowspan="5">Ⅵ期
（15c前半〜16c中葉）</td><td rowspan="5">Ⅵ期
（15c中頃〜16c前葉）</td><td rowspan="2">Ⅷ期
（15c中葉）</td></tr>
<tr><td>第3四半期</td><td rowspan="3">Ⅴ期
（15c後半〜16c初頭）</td><td></td></tr>
<tr><td>第4四半期</td><td></td><td rowspan="3">Ⅸ期
（15c後葉〜16c前半代）</td></tr>
<tr><td>16世紀第1四半期</td><td></td></tr>
<tr><td>第2四半期</td><td rowspan="3">Ⅵ期
（1500頃）</td><td></td><td rowspan="3">Ⅶ期
（16c代）</td><td></td></tr>
<tr><td>第3四半期</td><td rowspan="3">Ⅶ期
（16c後半〜17c初頭）</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>第4四半期</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>17世紀第1四半期</td><td></td><td></td><td>Ⅷ期
（近世）</td><td></td></tr>
</table>

学研究所遺跡番号 72 の土壙 73 出土遺物と同一であり、中世京都の土師器皿の影響下で製作されたものと考えられる。他方、横小路周辺遺跡において最新の溝 1 上層出土の手づくねが平泉出土の手づくねかわらけと非常に良く似ていることは、東日本の中でいち早くかわらけを用いた奥州平泉の手づくねかわらけの影響が鎌倉の手づくねかわらけの中では遅れて現れていたことを示していよう」［宗臺 1992：75-76］と述べている[14]。しかし、京都からの影響を指しているものの、口唇の面取りが体部の横ナデより先行して施されているように京都工人の移動ではなく、鎌倉の「かわらけ」製作集団によるものであり、在地化がすでに表われている。

さて、長くなってしまったが、鎌倉で調査を担当している、または調査していた者による「かわらけ」の編年を中心として、その系譜や用いられ方についての概要をたどってきた。これらを表として松吉がまとめている［松吉 2016］ので、若干の訂正を加えた上で、示したので参照されたい。ただし、表で示されない部分として次の点に注意する必要がある。それは土器の分類と時間軸の設定と同時に、「かわらけ」をあつかう際に常に論じられてきた「かわらけ」とはどのようなものであるのかという問いかけである。松吉が各論者にほぼ共通する認識として［宗臺 1992］によるかわらけの定義を以下のようにまとめている「①他の供膳形態全器種を見渡して、皿としての機能のみを有していたと思われ、②高台や脚台をまずもたない。③法量が大・小もしくは大・中・小に分化する。④その用途では、政治・経済の中心地に多く、地方村落に少ない出土傾向とかわらけ溜まりとして発見される原因

表 2　各編年案における鎌倉出土かわらけの器型変遷（松吉 2016 を一部改変）

時期	斉木[1983] 器形変化 手	斉木[1983] 器形変化 口	服部[1985] 器形変化 手	服部[1985] 器形変化 口	馬淵[1998] 器形変化 手	馬淵[1998] 器形変化 口	河野[1986] 器形変化 手	河野[1986] 器形変化 口	宗臺[2005] 器形変化 手	宗臺[2005] 器形変化 口
12世紀第1四半期						大・小 在地系譜				大・小 在地系譜
第2四半期				大・小 在地系譜	登場 大・小					
第3四半期						新系譜 出現		大・小 在地系譜	登場 大・小	
第4四半期		大・小 在地系譜	登場大・小			消滅	登場大・小			
13世紀第1四半期	登場 大・小					皿型 出現				中型出現
第2四半期					1240年代 消滅	消滅				
第3四半期										薄手丸深登場 1280頃
第4四半期			消滅	中型出現		中型・薄手 深皿出現			消滅 1280頃	
14世紀第1四半期										
第2四半期							消滅	中型 出現		
第3四半期						大・小 新系譜				
第4四半期		中型出現 薄手		薄手化		大型 薄手化		薄手化		
15世紀第1四半期	消滅			厚手化						
第2四半期								厚手化		
第3四半期										
第4四半期										
16世紀第1四半期										
第2四半期										
第3四半期										
第4四半期										
17世紀第1四半期										

がハレの場での一括大量使用を想定させるなど、穢れの忌避と結びついたものであったと思われる」［松吉 2016：23］。①～③は古代末以降の焼き物の種類ごとの器種の限定化や製作手順の省略化といった時期区分の指標となるもので、土器という焼き物における中世化として多少は首肯けるものであろう。④は使用法であると同時に意味論にまで展開してしまっており、二つの規範からの規定となっている。

一つは、中世土器「かわらけ」の器としての系譜であり、いま一つは「かわらけ」の使われ方とその社会的意味である。後者については「かわらけ」が日常の飲食用途であるのか、非日常儀礼で用いられたものであるのかが主に問われている。服部が躊躇しながらも儀礼的用途を否定せず、他の論者は全てそうした用途を認めている。「かわらけ」を扱う際の既定の理解とさえ受けとれるが、はたしてそうであろうか。前者については手づくねがどのようにして鎌倉にもたらされたのかが問題となる。手づくねについては、「京都系手づくねかわらけ」（宗墓）や「京都系土師器」（服部）の他、馬淵は「平安京直系」［馬淵 1998：244 表］とし[15]、河野は明言しないけれども京都を意識しているのは明白で「なぜ在地のものがあるのに手づくねのものを採用する」［河野 1986a：193］のかと述べる。この在地でなく、京都もしくは平安京由来の土器であるのならば、なぜその製作技法が持ち込まれたのだろうかを河野は問えといっている。その問の先にあるのが手づくねを用いることの社会的意味であり、器としての「かわらけ」の意味であろうと予測できる。鎌倉の「かわらけ」の系譜を編年から考えるには、京都をはじめとして鎌倉より以前から手づくね「かわらけ」を用いていた平泉での研究を見ておく必要がある。

京都中世土師器の研究

中世京都の「かわらけ」は、地下鉄烏丸線の工事をきっかけとして大きく注目されるようになり、［横田 1981、1984］や［伊野 1985、1987、1989、1998］をはじめとして同志社大学校地内学術調査委員会、京都大学埋蔵文化財センターの成果が陸続と報告・分析されるようになる。そして横田も伊野も胎土の色調を基本として、器形と器型を規定した整形技法の組み合わせで分類し、編年を試みている。ここで伊野による分類を記せば、生産工程の省力化を計りながら 14 世紀まで続く褐色系を A タイプとし、A タイプと同時期に生産が開始され 12 世紀初頭まで続く乳白色系の「て」字状口縁のものを B タイプ、13 世紀後半に出現して 14 世紀末まで続く白色系を G タイプとする。G タイプは 15 世紀には淡褐色系の I タイプとなり、I タイプは当初、褐色系と白色系があるが、15 世紀後半には褐色系に統一される」とした［橋本 1990：59］。なお、伊野はその生産地として A タイプを深草、B タイプを栗栖野、G タイプを嵯峨、I タイプを幡枝とした。

横田も中世土師器皿の分類を行ない、生産地の推定を行なう他に、幡枝で発見された焼成窯の復原推定や、18 世紀前葉の記述から木野・八軒・深草の生産者が、「主に農業を営み、土器生産に従事するのは年に 17 日のみ」［横田 1988：77］として、江戸時代と中世の社会情勢に差異があるにしても、醍醐寺への貢納品の他に街に出荷する商品までも生産可能であったことを示唆している[16]。

近年では中井淳史が中世京都の「かわらけ」について『日本中世土師器の研究』としてまとめている［中井 2011］。そこに所収されている［中井 2003］で、中井は中世京都「かわらけ」の特徴を手短にまとめ東日本の「かわらけ」との異同を論じているので、それからみていこう。なお、中井は中世の土器皿を「中世土師器」とし、京都で作られたものを「京都産」、洛外で製作された「中世土師器」を「京都系」とする。

12 ～ 13 世紀の京都産土師器は「中世を通じて手づくねで成形される。（中略）帯状の粘土をまきあげて皿状に成形する方法であると思われる。細部の整形は（中略）まず見込みを全周一方向にナデたのち（一方向ナデ）、体部内面から口縁部外面を右回りにナデる方法（横ナデ）が採用されている。この手法は生産の場においてきびしく遵守されていたようで、逸脱した資料はほとんど皆無といってよいほどみあたらない」［中井 2003：54］。「他地域との比較にあたって、もっとも重要な特徴となるのが口縁部の形態である。12 ～ 13 世紀においては、4 種類の形態が確認される。1）2 段ナデのちに、口縁端部に面取り（2 段ナデ面取り）、2）2 段ナデのみのもの（2 段ナデ）、3）1 段ナデのちに、口縁端部に面取り（1 段ナデ面取り）、4）1 段ナデのみのものである（1 段ナデ）。（中略）面取りとは工具あるいはナデによって口縁端部を斜めに削って傾斜面を付ける手法である。（中略）12 世紀後半には 4 種類すべてみられるが、13 世紀になると 3）・4）が主体となり、さらに 14 世紀以降になって 4）のみというあり方へと変化する。（中略）口縁部形態と法量分布の間に特別な相関関係はみいだしがたい。12 世紀後半段階は 9.0 ～ 10.0 ㎝と 14.0 ㎝前後にピークがあるが、漸次縮小していく傾向がみられ（中略）大皿は器高の縮小化が著しい」［同上：54-55］。

こうした京都産中世土師器の特徴を踏まえた時に、大皿の器高の変化は鎌倉の手づくねのそれとは正反対の動きを見せている。また、京都産中世土師器と京都

系中世土師器の決定的差は、器壁の厚さであり、韮山の手づくねを京都産と比較した場合を述べた文章で、「ナデ調整は底部内面を一方向にナデたのちに、口縁部内外面をナデる手法が採用されている。これは京都産土師器と同一である。（中略）成形技法も京都のそれが忠実に踏襲されていることがわかる。しかし、器壁は6㎜前後と厚く、この点では隔たりが大きい」［同上：62］と記している。このあたりの整形における気の使いようが東日本を含めて洛外や畿内以外の地で作られた手づくねの系譜を考える場合の注意点であり、また受け入れ手側の論理が奈辺にあったかを探る際に考慮すべき点であろう。

さて、京都産の中世土師器を詳細に論じ、古代から近世の土器変遷のなかに位置付けた［中井 2011］は、中世土師器を日常の食膳具をする。同様の意見は畿内の中世土器を論じる研究者に共通のようである。東日本、とくに鎌倉の「かわらけ」の系譜とそこから窺うことができるであろう「かわらけ」の食膳具のなかでの位置付けやその意味を考えたい本稿では、畿内での中世土師器と他の土製の器との関係を知っておく必要がある。

畿内の土製食器

9世紀の平安京から14世紀の中世京都における須恵器の変遷から中世の土器様相がどのように形成されたかを探った宇野隆夫は、5つの画期を設定して論じた［宇野 1984］。

「畿内の多くの地域では供膳用の椀に黒色土器・瓦器を多用するのに対して平安京･京都では、緑釉陶器･灰釉陶器・中国製陶磁器とおそらくは漆器を多用する（後略）」と全体像を示し、「畿内を総体としてみるならば、土師器系の土器（土師器・黒色土器・瓦器）以外の食器生産がすたれ、発達した流通の体制によって他の必要な製品を入手するようになる地域とみなしうる（後略）」［同上:102］とする。その背景として「平安京における需要の変質と特定器種の広域流通に示される流通体制の革新によって10世紀に確立した土器と陶磁器の地域・器種分業体制が重要な出発点になったと考える。この動向が11世紀中頃の大きな変動を経て12世紀中頃の生産・流通・消費ともに中世的展開をとげる段階に帰結した（後略）」［同上：101-102］とした。漆器を取り上げている点に注意したい。木製品の遺存率は低く、漆のコーティングによって遺存率が高まるにしても漆器を積極的に評価する姿勢は、東日本でも近年ようやく一定の認識を得るようになってきた。また、製品の入手を外に依存し、流通体制の確立が必要な姿は、陶器生産を行なう東北よりも中世の鎌倉に近似しているといえよう。

橋本久和や、森　隆、鋤柄俊夫らも土師器系の土器を対象として古代から中世への転換を論じている。橋本は「10世紀中頃から後半にかけて灰釉陶器の器形と極めて類似する椀が各地に出現する。そして、畿内では土師器杯、小皿と黒色土器の組み合わせになる。しかし、(中略）ヘラ削り手法という古代的技法が残っている。（中略）瓦器椀が出現し、東播系須恵器鉢や中国華南産白磁の普及が認められる11世紀中頃から後半にかけては、瀬戸内周辺においてもロクロ土師器とは異なる土師器椀が出現する。そして、瓦器椀・土師器椀は以後14世紀代まで生産が継続する」［橋本 1987a：30］と、11世紀中頃から後半を中世の始まりとする持論の上で、「7世紀後半に成立した「律令的土器様式」は金属器志向型を基調に、供膳具の器種分化･規格化に象徴され」［橋本 1990:39］たものが、「9世紀前半（には）（中略）法量の縮小と規格性の喪失･須恵器坏類の激減・緑釉陶器の出現によって特徴づけられる。これに、初期輸入陶磁器を加え、9世紀から10世紀に至るものを「平安時代土器様相」とも呼ばれる。このなかで、供膳具の中心を占めた土師器と黒色土器」［同上：39］（カッコ内は筆者による）をみていいくと、「10世紀中葉から11世紀にかけて、土器様相に顕著な変化がみられる。土師器にいわゆる「て」字状口縁をした坏・皿が出現し」［同上：40］、「10・11世紀代は汎日本的に古代的な土器様相から、中世的な土器様相に転換する時期で(後略)」[同上:36]あったとする。その結果、「11世紀中葉を境として、畿内の土器様相は供膳具の瓦器椀・土師器皿を中心とするものになる。貯蔵具（甕・壺）は東播系須恵器・東海系陶器を中心とする。煮炊具は土師器・瓦質で、調理具（鉢）は東播系須恵器が大半を占める。輸入陶磁器は供膳具・貯蔵具の一部を補完する」［同上：54］。すなわち、供膳具をはじめとして煮炊具までが土製品となる。東日本の同時期の様相とは大きく異なる点が注意される［服部 1986］。そして、「12世紀中葉から13世紀にかけて、瓦器椀は簡略化傾向が始まる。この時期には常滑甕を中心に東海系陶器が出現し、東播系須恵器とともに貯蔵具を担う（後略）」［同上：55］ようになり、「13世紀後半から14世紀中葉にかけて、瓦器椀は法量が著しく縮小し、ヘラ磨き、高台の省略など簡略化が進み、椀としての機能を果したものか疑問視する考えもある。土師器皿も白色系のGタイプとこれを模倣したものが使用される」［同上：56］と理解する。そして、畿内を見渡した総論としての中世土器の特徴は、土器が供膳具の一部に限定して用いられた東日本の土器様相と比較して「畿内では（中略）11世紀前半をもって、官営工房的背景をもつ土器・陶器生産は終焉する。（中略）この間に、楠葉型のように、

より専業化した黒色土器B類椀が生み出され、瓦器椀生産へつづく。（中略）11世紀中葉から後葉に各地でみられる新たな土器様相の出現と、その背景にある権門・寺社との関係に中世的土器生産の特質があると考え、この時期にこそ中世の開始を求めるべき（後略）」［同上：66-67］とし、「変質を続けながらも14世紀中葉までは基本的な土器生産は維持されるが、南北朝の社会的混乱を経て、瓦器椀など主要機種は姿を消す（後略）」［同上：67］とする。

こうした古代末から中世への転換が土器類によって担われた様子を森は一連の論考にて次のように述べている。

「とくに畿内地域では、和泉陶邑窯において5世紀代に須恵器生産が開始されて以来、土師器・須恵器の分業的生産体制の保持が明確で、この傾向は篠窯において須恵器生産が終焉する11世紀前後まで、一貫して変化しない。従って土師器・須恵器の両生産技術の体系が交流したり融合することは原則として認められないので、畿内では地方で一般に広くみられるような回転台土師器生産は基本的に存在し得ない。このため、畿内土器椀生産の技術系譜は、伝統的な畿内土師器生産技術の延長で考えることができる」［森1993a：26］。そして、「9世紀前後を境に、まず和泉陶邑窯の衰退に呼応して須恵器製供膳器の生産が漸減する方向を辿り、これと表裏して土師器生産の内部に一定の器種別分業の発展（黒色土器A類生産の分化）（中略）同時に、この時期それまでの金属器志向型を基調とする食器様式が大きく変化し、新たな中国陶磁器への志向を基調とする『王朝国家的食器様式』が生成する。（中略）磁器型椀・皿類主体の単純な組成であることに特徴があるが（中略）、焼き物別の組成により階層性が強調される点は、本質において律令国家的食器様式を直接継承する古代的食器様式と見なすことができる」［同上：29-30］。「畿内中央、特に都城とその周辺生産窯においては、古墳時代以来の土師器・須恵器製の食器が安定的に供給された結果（中略）、都城の『律令国家的食器様式』が厳密に施行された（後略）」［同上：28］。「土器椀の器形（中略）の初現は、平安時代前期に遡るが、11世紀以降にみられる磁器型土器椀は、10世紀後半頃に確立した磁器型深椀（越州窯系青磁Ⅲ類深椀模倣）の型式を直接継承・発展させたもので、12世紀代には祖形の型式的制約を脱して完全に和風化した独特の食器形式として、広範な地域で定着・確立を見た（後略）」［同上：20］。

「11世紀代に入ると中国磁器の輸入状況が大幅に変化し（中略）、越磁を頂点とした磁器型食器様式の序列が崩壊する。（中略）越磁のイメージを忠実に再現した緑釉陶器生産は決定的な打撃を受けたようで、11世紀の前半にはほとんどの地域でその生産が終焉している。（中略）（他方、）深草や栗栖野をはじめとする土師器生産と、楠葉窯における黒色土器B類生産が、11世紀以降も存続・発展する。（中略）11世紀を前後して平安京内における年中行事や宴の様式が完成し、これに伴って土師器皿が大量に消費されるようになる」［森1993b：29］（カッコ内は筆者による）。

「11世紀中葉以降数量的に卓越する中国陶磁（白磁）の流入が、12世紀前後には一定量のピークに達し、同時に日常最も消費の多い土師器皿についても（中略）「て」字状口縁タイプのものが消滅し、より量産に適した単純口縁の土師器皿のみの組成となり、法量も大小の二種となる。以後平安京では中国陶磁と土師器皿、それとおそらくは各種漆器製品からなる初期の組成が確立し、都市の『中世的食器様式』が形成される」［同上：30］。

やはり、11世紀頃を境に焼き物別の器種分担が崩壊し、食器構成における土器の比重が増すとともに、器形が量産に適した単純口縁に変化し、また大小の法量分化に収斂していくことを示している。森はこうした窯業生産が国内外を通じた流通機構の変化を底流として、生産体制の変化にも注意を向けている。

「手工業生産物資の獲得手段が直接的な自給の体制から、むしろ流通機構を介しての経済活動によって獲得していく方式に徐々に転換していく（中略）窯業生産の重層的構造の解体過程は、同時に手工業生産全般にわたる流通機構の重層的構造の成立とその発展の過程と不可分の関係にあり（後略）」［同上：34］、「中世の土器生産は、中央の権門・寺社・荘園領主や、地方の在地領主などに直接・間接に支配されるものの、相対的に手工業者自身の個別的な小規模経営が発達し、生産性を高めたと一般的に考えられている。そして、生産物の一部をこれらの支配層に貢納しながらも、残余の余剰生産物については市場などを経由して、商品として不特定多数を対象に販売していた」［同上：35］とみる。そして、畿内もしくは京都以外の地域でも「中世的食器様式にみられる斉一性、とくに様々な地域色を生じながらも磁器型椀という斉一的な食器形式を什器椀に採用する理由、あるいは食器組成において、大小の土師器皿（ないしは杯皿）と土器椀をセットで使用する容器が汎地域的に形成される理由について（中略）、在地の土器生産を支配・管掌する地方領主層の直接的な主導によるものと考えている。（中略）。都市域において先行して形成されていた中世的食器様式を、彼らの居住する地方農村の食器様式に移入しようとしたところにあるものと考えたい」［同上：37］（傍点は筆者による）と述べている。

最後に引用した文脈は、京都対地方の関係で述べた

ものだが、同様の論理は平泉や鎌倉、韮山などが手づくねの中世土師器皿を導入する場面においても敷衍できるのではないだろうか。さらには韮山や鎌倉、韮山と周辺地域との関係においても同様であろう。

磁器型を基調とするところからはじまる土製の椀を内包する畿内の中世食膳具について鋤柄は黒色土器の分析を通じて古代的土器様相から中世的土器様相の成立と、その生産供給体制を窺おうとしてきた。それらの一応の総括として［鋤柄 1998、1999］が挙げられる。［鋤柄 1998］では畿内の古代末から黒色土器と中世土師器皿を中心とした中世土器への展開とその変遷、さらにその意味について論じている。論考の前段では、古代と中世を規定、すなわち時代区分の手法として古代的な土器様相を捉えることでそうでない部分から中世的状況を復原するとしているため、森と同様に古代末以降の出土遺物とその生産流通形態を見極めることから筆を起している。須恵器＝篠窯鉢、黒色土器＝椀、土師器＝坏・皿・釜といった器種別分業にみられる供膳形態における須恵器生産の終焉を手がかりとして、11 世紀に瓦器椀の成立、焼成と成形における量産化を志向した動きなどからはじまり、各地の窯業生産品が持ち込まれるような「器種別分業のシステムと二元的流通の構造」［鋤柄 1998：18］の検討を視点とした分析が必要とする。大局的には上に見た橋本や森との相違はみられず、10 世紀後半を画期として、焼き物別の器種分担が崩れ、やがて「特定生産地」による「特定製品」の「大量生産」［宇野 1984］、または「器種構成の単純化、器種別分業の展開、在地型流通と遠隔地流通の複合といった生産と流通の構造」［広瀬 1986］の中世的土器様相に転換したとする。

鋤柄は論考の後半部分で京都型中世土師器皿の分類を宇野や伊野、横田による分類との対応を示しながら、各類型を系列と把握した編年に組み立てているが、「定量分析および文献資料（ママ）との対比が本稿の主要課題である」［鋤柄 1998：39］としているように、特定の系列を扱っているため、ここではその分類と変遷については論じない。ただし、文献史料との対応関係を論じた部分は、「かわらけ」、中世土師器皿の性格を探る際に参考となるため、当該部分をみておこう。

鎌倉時代以降の瓦器椀は、保水性の確保または装飾的調整であるミガキの省略から、瓦器椀が持つその本来的機能を消失して、「（竹田政敬氏による大和型瓦器椀第Ⅳ段階）以降の瓦器椀から日常容器としての性格を排除し、（中略）出土状況をふまえたその考察は、この時期における瓦器椀の非日常性を考慮する上で、「かわらけ」の非日常性の問題と対比される」［同上：60］（カッコ内は筆者による）として、橋本や森では一切語られることのなかった土器の非日常性を示唆している[17]。他方、「中世前期の土師器については、（中略）「権門貴族に分属した」貢納と商品の生産が推測されるわけであるが、特に貢納の面において（中略）山城長福寺所属の「田堵深草」・摂関家所属の「深草作手」等の形は、平安時代後期以降の連続する系列にある点で、「大・小土器」として使われた土師器皿 A 類がやはり 10 世紀後半以降 14 世紀代まで連続する状況と一致し、その「商品」としての面は、「深草」生産集団が単一であったか複数であった検討の余地が残るが、現実的に平安京域で確認される土師器皿の出土は、被貢納側が主体的な製品の販売を行えない以上、それが複数の供給先をもっていた点で、自立的な生産構造を持っていた部分を意味しよう。」

「一方、土師器皿 C 類の後半である皿型の製品は、法量規格の改変と京都における武家人口の増加により、前代より不特定多数を対象とした新規の使用形態が採用される点で消費側の変化が予想できる。もっとも藤原良章氏の指摘する「かわらけ」の非日常性から、「嵯峨」集団が野々宮神社の縁により朝廷へ貢納するかたち（中略）を否定するものではない。しかし、（中略）「嵯峨」集団が「幡枝」へ移動した後「粘土や薪の自由採取を保証してもらうため」に木野へ移住する過程は、その自主的な組織の様相を示すものとして「商業の座」への変質に対応する可能性が考えられる」［同上：63］と生産体制についての見解を述べている。14 世紀における武家人口の増加を引き起こすのは不在領主制をとる室町期の政治体制だが、土師器皿の京都における変革は「かわらけ」を非日常品として用いていた関東武士の増加も一因ではなかったろうか。

以上、引用文ばかりであったが、京都および畿内における中世土師器皿が食器の中でどのような位置付けにあったかを視点として見てきた。論者による時代区分の相違はあるが、古代末から中世へ向けて器種構成の単純化と産地別器種分業、そして製作手順の簡略化

表 3　京都産中世土師器分類対照表［鋤柄 1998］

横田	A1	A2	A3	B1	B2	B3	B4	C	E
宇野	C1〜C2	C3〜C5	D5、E			F		B〜34	
伊野	Aa (E) Ab		Ac	Ga1	Ga2、Ia	Ib	Ib	B	I
鋤柄	A1	A2〜5	B1〜9	C1〜4	C5〜6	C7〜12	C13〜15		B10

を伴う量産化、それらが在地生産の近距離と遠隔地生産の中遠距離交換がまじわって中世の食器形態が成立してきたことを示していた[15]。本稿であつかう土器類にあっては、楠葉など近郊の瓦器椀も用いられるが中世土師器皿は基本的に京都で生産され、器種構成の単純化によって一定の法量をもった坏・皿器形に収斂されていったことが示されていた。これら土器類のなかで瓦器椀に非日常性を認めた鋤柄の他は、基本的に土器類は日常の供膳具であったととらえている。

日常の食器、それも坏・皿器形の中世土師器皿が何故に鎌倉に手づくね「かわらけ」として導入されたのか、やはり手づくねの「かわらけ」を鎌倉よりいち早く用いた奥州平泉での編年とその系譜についての論考をみなければならないだろう。

平泉の「かわらけ」

奥州藤原氏の拠点となった平泉から「かわらけ」が出土することは古くから知られていた。そのなかには手づくね「かわらけ」も多くみられる。中山雅弘は平泉を中心とする東北地方の中世土器研究史を 3 期に分け、その概要を述べている［中山 2003a］。ここでは、平泉出土「かわらけ」研究におけるロクロ成形と手づくね成形両者に対する見解を中心として概観する。

藤原氏以前

古代の陸奥国府多賀城以後、中世の始まりは藤原氏の台頭以降と考えられがちだが、井上雅孝は器種構成の単純化と器種別分業という広瀬の「中世的土器様式」概念を前提に、器種構成の多様な古代土器が大小法量の二極化に収斂することをもって中世的な土器様式の開始ととらえ、10 世紀中葉に坏法量の小型化以降の土器様相の変容に注意を向けている［井上 2010］。10 世紀後葉に小皿が確立した後に、11 世紀前葉の組成器種の減少をへて、11 世紀中葉に椀・小皿の大小セットが確立する。さらにはこの小皿が「平泉かわらけ」の原型だとする。いわゆるロクロ「かわらけ」である。しかし、井上は 12 世紀中葉の手づくね「かわらけ」の導入が平泉の土器文化にとっての一大画期であり、これ以後を中世ととらえる考え方を示す。その結果、平泉の土器様式を「古代「ロクロかわらけ」と中世「手づくねかわらけ」の二重構造的な世界」［同上：185］とやや混乱を示している。その混乱は「少なくとも「手づくねかわらけ」の京都風という雅なイメージから、在地系の「ロクロかわらけ」に対して「手づくねかわらけの補完品」という評価を与えることは慎まなければなるまい」［同上：185］と拡大してしまった。おそらくは古代と中世ではなく、在地と京都系として把握できるのではないだろうか。ただし、そうした状況下で、なぜ京都系「かわらけ」を用いる時期がなければならないのかを考えるべきであるが、「かわらけ」の淵源を古代末のロクロ土師器にあるとした点は重要である。他方、京都系「かわらけ」、すなわち手づくね「かわらけ」については岩手県文化振興財団が調査をおこなった柳之御所跡での成果をもとに多くを論じているのが松本建速である［松本 1992、1993、1994、1995、1996、1998］。

柳之御所跡

松本は柳之御所跡が秀衡によって平泉館として造営された平泉政権における政治の中心地であったことを前提に、そこから出土する「かわらけ」が儀礼的に使用されたものとみなしている。「かわらけ」出現にいたる過程については、内黒処理高台椀のロクロ土師器が現れた 10 世紀後葉の後、内面無処理ロクロ土師器皿と柱状高台杯が 11 世紀中葉から末に現れて、それらロクロ土師器に大小法量セットの確立を認める。手づくね「かわらけ」が現れる以前に坏と小皿の大小セットが平泉で用いられていたと同時に、大小セットの出土地点が「一般民衆の居住地ではないという特徴がある」［松本 1992：50］とする[18]。他方、松本は「ロクロかわらけの大皿は形態的には内面無処理ロクロ土師器椀から変化したものでないであろう」［同上：50］と当初は想定しているが、それは形態的なものであり、技術的には在地のロクロ土師器の系譜と考えていることは確かである。こうした認識をもとに柳之御所跡におけるロクロと手づくねの「かわらけ」を共に出土する遺構出土品の検討から、「（ロクロかわらけの）調整時のナデによる凹凸を胴部に残し、器高が低くなっているものは、手づくねかわらけの二段あるいは一段ナデ技法の影響を受けたものと解釈できよう」［同上：53］（カッコ内は筆者による）としている。このような視点、または技術的・形態的影響関係は鎌倉出土「かわらけ」でも認められたもので、手づくね「かわらけ」が導入される経緯において、たとえ平泉からであっても同時期のロクロ「かわらけ」は在地の工人によるものであることは明らかであり［宗墓 1998］、松本も「ロクロかわらけ小皿は、11 世紀後半から 12 世紀初頭頃のロクロ土師器小皿に類似しており、在地の前時代の製作技法を継承するロクロ土師器製作者が製作したと想定できる」［松本 1992：57］とする。しかし、一方で「平泉には 12 世紀第 2 四半期頃に、まず手づくねかわらけが入り、次にその職人に教えられた在地のロクロ使用者がロクロかわらけを多量に製作した。そして、極少量ではあるが、在地のロクロ土師器製作に源をもつ製作者の系譜もあった、と解釈できる」［同上：

57］として、当初は手づくね「かわらけ」が先行して後にロクロ「かわらけ」が大量に生産されたと想定していた。さらに「かわらけはそれ以前の在地の土器製作伝統の上に出現したとは思われない。（中略）平泉藤原氏が滅びてからは突然出土しなくなる。（中略）かわらけの使用とは、一般庶民が真似ようとしなかった文化なのである。生産の場に注目すれば、在地の内面無処理ロクロ土師器にも連なる土器ということができるかもしれない。しかし、12 世紀中葉前半以降のかわらけの形態や、調整技法は、平安京型かわらけをモデルとしたものである。（中略）ロクロかわらけは在地の土器というより、短期間ではあったが異文化が定着したことを示す象徴の一つとして解釈されるべきものではなかろうか」［同上:60］として、「かわらけ」そのものが在地の文化の一部として定着せず、あくまでも外来の異文化を一部、すなわち政治中枢にある為政者が平安京の政治文化の一表徴として取り入れたものとの理解を示す。その結果、「12 世紀には一般民衆のための土師器はすでになくなっていたと考えられる」［同上：61］として、一般民衆は木器を食膳具に専ら用いていたとしている［三浦 1990］[19]。その使われ方を示すものとして、完形あるいはほぼ完形のかわらけが一括廃棄される大きな建物付近の深さ 4 ～ 5 mの形態的には井戸に近い素掘り土坑や深さが 1.5 m未満の土坑の他に道路側溝、園池内、窪地を取りあげて、「かわらけ」は、短期間のうちに大量に使用され、廃棄されたと読み取っている［松本 1992：61］。しかし、こうした土器の用い方は、9 ～ 10 世紀の内面無処理ロクロ土師器の坏･埦にも「秋田城､胆沢城といった公の場としての城柵や、西根遺跡のような大きな掘立柱建物のある遺跡で窪地や井戸跡に完形品やほぼ完形品を一括して廃棄された状態で検出される場合がある」［同上：63］として認めている。そして、こうした完形のままの一括廃棄は、内黒ロクロ土師器や須恵器が存在している時期でも、あくまでも内面無処理ロクロ土師器が選ばれている」［同上：64］として、素焼の土器が大量使用一括廃棄される対象であったことを示している。すなわち、素焼き土器としての内面無処理ロクロ土師器坏や埦と「かわらけ」は同様の用いられ方をするなかで、坏・皿の「かわらけ」が平泉以後用いられなくなるとの解釈であり、ロクロ「かわらけ」とロクロ土師器との分別に混乱がみられる。

なお、「柳之御所跡には、捨てられているかわらけの量が千個体を越すような土器廃棄遺構はないが、土坑に完形品やほぼ完形品のかわらけを数点～数十点一括廃棄する遺構はいくつもある」［同上:62］とするが、挙げられた点数ほどであれば鎌倉では海浜砂丘の職能民居住地域でもたびたび発見される。先に述べられていた一般民衆は「かわらけ」を用いなかったとする見解に違和感が残される[20]。

平泉出土「かわらけ」を上のようにとらえた松本は、次に手づくね「かわらけ」の編年案を示す［松本 1993］。ロクロ「かわらけ」については、すでに［中山 1988］が福島地域で論じており[21]、松本は積極的にロクロ「かわらけ」については述べず、後年手づくねとの関係を論じるに留まる。

まず、成形では「直径や器高のばらつきが大きいことから考えて内型を用い」［松本 1993：54］ず、「蓮の葉状の粘土板を作り、その切れ目をつないで（埦型を）作ったと思われる」［同上：54］（カッコ内は筆者による）として、粘土円板からの製作を示している。つぎに整形は体部の一段ナデまたは二段ナデと口唇部の面取りが行なわれるとする。内底面の整形は一方向の横ナデの他、多方向や同心円など多様であるとしている。その順番は「口縁、口唇部の整形 → 内面底の横撫で → 口縁ナデ、という工程がおこなわれた」［同上：55］と理解したうえで、［宇野 1981］を参考に口縁部の形態分類を行ない、二段ナデを C 類としてナデと口縁の形状から細分を行なう。なかでも、面取りが「指の腹のように丸い面を持つもので（中略）「面取り」と言うより「つまみ」の結果ついた場合もあるかもしれない。（中略）これを C5’ 類［松本 1993：56］とする。この他に一段ナデを D 類と分類する。

整形と形態からの分類をもとに、出土遺構の前後関係と伴出した折敷の年輪年代測定値をもとに大枠を設定し、さらに伴出陶磁器の年代と口径の法量、それに平安京での編年案との対比から平泉の手づくね「かわらけ」の編年案を組み立てた[22]。これらの手続きを経て、松本は平安京の中世土師器皿と「完全にその推定存続時期が一致するとは言えないが、変化の大枠は平安京で使用された手づくねかわらけと平泉の手づくねかわらけは類似している。平安京と平泉に製品を供給している製作者の間には、なんらかの関係が存続し続けた可能性があろう。あるいは、両地域での法量が次第に小さくなるという類似した変化をたどるのは、使用者の要求が類似していたことを示すのかもしれない」［同上：73］と解釈する。京都・平安京と平泉の手づくね製作の間に直接的な関係を想定してるが､［伊野 1987］で指摘される大量生産が法量の縮小を引き起こす可能性も視野に入れており、京都と平泉の手づくね「かわらけ」をめぐる関係について断言を控えている[23]。

法量変化をみせる手づくね「かわらけ」は、口径が 14 ㎝以上の 12 世紀中葉頃と口径が 13.6 ㎝以下の 12 世紀後葉～末葉頃に少なくとも二期に分けられるとし､明確に 13 世紀のものと考えられる遺物に伴う「か

わらけ」が出土していないことを前提に、柳之御所跡では12世紀第4四半期を最後に手づくね「かわらけ」はみられなくなるとした。他方、13世紀以降も手づくね「かわらけ」が出土する鎌倉へは、平泉からの影響を示唆している。しかし、鎌倉の宗墓編年案で指摘したように確かに平泉の手づくね「かわらけ」が鎌倉に影響を与えたが、それは京都からの第一波に続く第二波としてであった。松本は平安京の中世土師器皿との関係を次のように記している［松本1995］。

［中井2003］が京都産中世土師器皿との関係を問う場合に重要視する「器の厚さという属性は、特にその点に重点を置いて教えられなければ、軽んぜられるのではなかろうか」［松本1995：77］とした上で、器壁の厚さが京都産の4～5㎜を超える4～7㎜の平泉の手づくね「かわらけ」の要点を次のようにまとめる。

口縁部形態

1. 二段ナデ（C類）	面取り無し	口縁部が内湾し、端部が丸い
	面取り無し	上部をつまみ上げて、なでる
	面取り有り	口縁部に面取りを施す
2. 一段ナデ（D類）	面取り無し	口縁部が直線的に立ち上がり、端部が丸い
	面取り無し	口縁部が弱く内湾し、端部が丸い
	面取り有り	口縁端部に面取りを施す［同上：76］

つぎに製作の手順を示して、

成形	1. 扁平な粘土板を作る。
	2.1で作った粘土板に切れ目を入れる。
	3. 皿状に成形する。
	4. 口縁部を成形する。（場合によっては、口唇部を面取りする）
調整（整形）	1. 内面底をなでる。
	2. 口縁部をなでる。［同上：77］

注意点としては、「一回のナデだけで、形態としては二段のナデ痕をつけてしまうものとがある」［同上：78］としているものの、「洛内、洛外をとわず、かわらけの成形技法は柳之御所跡出土のものと共通するものが多い」［同上：78］と理解する。また、口唇部の面取りがナデ整形の前に行なわれている点は鎌倉にも同様にみられるとして[24]、双方ともが京都からの伝播であったこととする。

ついで、整形に用いるヘラは、「内面底をなでるのに用いられている。板を利用しているのであろうが（中略）あるいは、板の先端部を細かく分けた刷毛状のものかもしれない」［同上：79］との観察結果を述べている。

胎土については、「柳之御所跡の手づくねかわらけもロクロかわらけも、粘土には海綿状骨針が含まれる。（中略）しかし、砂の混ざる割合や混ざる砂の粒径は、柳之御所跡出土品でも、ロクロ製品と手づくね製品とでは、傾向が大きく違い（中略）、胎土の選択は、地質環境に決定されるのではなく、製作された製品の質感に対する趣向の違いに規定されると推定できる［同上：81］とするものの、ロクロと手づくねの互いの影響関係からすれば、製作者集団の差として理解できるのではないだろうか。その製作者についても京都との関係に注視して、「形態のみならず、製作技法も細かい点まで洛内、洛外の製品と一致（中略）、器の厚さに注目すると、洛外出土の製品により近い。（中略）形態や、製作技法であれば、伝聞やモデルの模倣でも、ある程度可能かもしれない。しかし、法量（厚さに関してはあまり考慮されない場合が多いが）、形態、製作技法、製作に用いる用具、胎土に含まれる砂と粘土の割合と、どの要素をとっても共通している。このことから、伝聞やモデルの模倣、と考えるよりも、製作者が移動したと推定する方が、事実に即しているのではないだろうか」［同上：81］とし、「深草の土器製作者の中でも、洛外に供給していた人々の中にある人が平泉に来たということが想定されそうである」［同上：82］と、［伊野1987］を参考に京都からの直接導入を指摘した。

こうして、松本は平泉の手づくね「かわらけ」が京都からの直接導入をはかったものであり、平泉側の強い意図のあったことを指している。松本はより具体的に［松本1994］で手づくねとロクロ「かわらけ」の関係を論じるなかで、手づくね導入の理由を探っている。その是非はともあれ、いわゆる京都系と称される京都以外の地で出土する手づくね「かわらけ」がどのようにして導入、または伝播したかを探る際の参考になろう。

まずは平泉に畿内からもたらされたのは「もっぱら洛外で用いられていた瓦器ではなく、洛内で用いられていた手づくねかわらけだけだったのであ」り、「平泉では、どうしても手づくねかわらけを使いたかった理由があった」。そして「洛内における手づくねかわらけの使用と同じような使用のあり方が、平泉でも行なわれていたのかもしれない」が、「平泉ではロクロかわらけも用いられ」ており、「使用者側の選択が強く働いていた」［松本1994：23］との全体的理解を示す（傍点は筆者による）。そして、［松本1992］ですでに指摘してされていたように居館跡などの空間で11世紀以降のロクロ土師器が非日常的な器として用

いられていたと想定し、手づくね「かわらけ」が導入された「12 世紀後半代の平泉では、用途に応じて形態が選択されていた可能性が考えられる。手づくねかわらけに近いロクロかわらけは、手づくねかわらけと同じような用途に、そして、坏タイプ、深い椀タイプのロクロかわらけは、何か特定の儀礼に用いたのではなかったか」［松本 1994：29］とする[25]。こうした手づくね「かわらけ」に対して、それまでの岩手県南部や宮城県北部のロクロ土師器は、11 世紀代に器壁が次第に厚くなり、器種も大型坏と小皿の 2 種類になって 12 世紀代の「かわらけ」に近づいたとする。すなわち、「10 世紀代までは、ロクロ土師器（素焼き土器）は、日常的食膳具であると、製作者からも使用者からも考えられていた。したがって、製作者も入念に製作していた。それが、11 世紀代には既に日常的食膳具ではなくなっており、ロクロ土師器に対する人々の観念は変化していた。ロクロ土師器（素焼き土器）は、一般的な器とは思われておらず、儀礼時に用いる簡易的に作られた模倣品であるという意識があったのではなかろうか。製作者、使用者どちらもそのような観念を持っていたのではなかろうか。したがって、製作者の側でも、入念に器壁を薄く作る必要はなくなったのである」［同上：30］と想定する。京都では日常の器として土師器の器壁は薄かったが、大量に使用する非日常品であるがため、製作の省力化によって器壁が厚くなったとの見解と受け取れるが、単純にそうした理解で良いのだろうか。加えて、てづくね「かわらけ」＝京都系中世土師器皿は平泉で初めて儀礼的に用いられたとも解釈でき、なぜ京都の土師器皿を必要としたのかという視点がぼやけてしまう。

松本自身も「12 世紀平泉に手づくねかわらけを使う風習が移入される。（中略）その過程で育ったのが、器高が低いロクロかわらけである。まさにそれは手づくねかわらけの模倣品であったのだ。平泉においては、器高が低いタイプのロクロかわらけは手づくねかわらけと同じような用途で多量に用いられること、そして、手づくねかわらけは平安京においては何らかの模倣品なのではなく、それこそが特定用途に用いる専用品であったことが手づくねかわらけがモデルたりえたことを示していよう」［同上:30］（傍点は筆者による）。「手づくねかわらけを使うかその模倣品のロクロかわらけを使うかで、その行為の「格」が違ったこともあったかもしれない[26]。（中略）1 世代以上続いた場合、徐々にその意識も変わっていったことだろう。また、手づくね＝平安京＝本格的、ロクロ＝平泉＝代用品＝二流、のような意識が当初、仮にあったとしてもそれも、平安京と知っている人と知らない人では違った内容の意識になっていただろう。（中略）モノに与えられた意味は、地域、時代、それに対する人々によって違う」［同上：31］とするのだが、あらためてなぜ京都で日常品であった中世土師器皿を非日常の手づくね「かわらけ」として導入したのであろうか。中井の主張が一面的であるとの意見は東日本の研究者が少なからず抱いていると思われる。それであっても、東日本地域で読み取れる「かわらけ」の使用法やその意味を京都における中世土師器皿にも適応するのは許されないだろう。そうであれば、これまでみてきたように、なぜ東日本のロクロ土師器とともに手づくね「かわらけ」を出土する古代末以降から鎌倉期に入ってからの「かわらけ」全般に非日常性を読み取れるのかという視点にたつべきであり、そこには導入する立場から窺う視点が必要であろう。模倣される側からの論理ではなく、模倣する側からの論理であり、さらに実際に模倣する時に模倣対象のどの部分が模倣対象を最も良く表していると認知していたかの議論ではないだろうか［宗臺 1998］。

松本は以上にみてきた考察に加えて、絵巻物類に散見できる器類の使用上の検討から、あらためて「かわらけ」の非日常性について論じたが［松本 1996］、それまでの考察をまとめる形で平泉を中心として東北地方の「かわらけ」の意味を説く［松本 1998］。なかでも、手づくねとロクロ「かわらけ」作りの各工程における男女別労働から手づくねとロクロ「かわらけ」の工人集団が異なっていたであろうことを探り、タイプの異なる手づくね「かわらけ」の存在は、複数時期にわたって京都から工人家族が来たとした［同上：50-51］。

松本の諸論考は、平泉政権中枢における非日常性を帯びた「かわらけ」使用が古代末のロクロ土師器の性格を引き継いだものであったが、京都・平安京の中世土師器皿を用いる「風習」を手づくね「かわらけ」として政権中枢の「特定の儀礼」に京都風を平泉に持ち込んだとした。移入された手づくね「かわらけ」は従来のロクロ「かわらけ」より高位のものとされ、その手づくね「かわらけ」を作るために直接京都から工人が複数回にわたって招き寄せられていたと理解した。そして京都の中世土師器皿を京都の工人によって平泉おいて模倣させ、ロクロ工人もそれをさらに模倣したと想定している。しかし、平泉町の八重樫は京都系とされる他遺跡の手づくね「かわらけ」も視野に入れて平泉と鎌倉で出土する手づくね「かわらけ」について検討し、平泉手づくね「かわらけ」は京都から直接導入されていないとする［八重樫 2014］。

京都直入ではない

八重樫は［中井 1998、2003］などを受けて「京都産」と「京都系」の差異を前提に平泉と鎌倉の手づく

ね「かわらけ」の法量と整形技法の観察から、それらが京都直系ではないとした［八重樫 2014］。石川県矢駄アカメ遺跡から 12 世紀前半に位置づけられる柱状高台やロクロ土師器小皿にともなって大小の手づくね「かわらけ」23 点が出土した。それらの「かわらけ」の形態は京都の中世土師器皿だが、胎土が異なるという。すなわち、京都の工人がアカメ遺跡附近に移動してそれらの「かわらけ」を製作したのである。それらを参考にすると、平泉と鎌倉の手づくね「かわらけ」の整形と法量が「京都産」とは異なり、松本が想定するように京都から工人は来ていないことになる。しかしながら、松本が指摘するように成形・整形にみる手づくね「かわらけ」の模倣の度合いがかなり高いのは確かである。八重樫が想定するように「京都産」中世土師器皿そのものが平泉や鎌倉にもたらされ、それをもとに作られたと想定するのも首肯ける。京都で実物を見ただけでは真似しきれないほどの類似点や製作手順がある。そして、八重樫はそれぞれの地に「京都系」の手づくね「かわらけ」が製作されたのは、「京下りの貴族が、主従関係を結ぶ場における宴会の重要性を説き、さらには京都の手づくねかわらけそのものをもたらし、それを使うことを進めたのである」［八重樫 2014：34］とする。やや短絡的すぎるであろう。松本が指摘し、また服部や河野が指摘するように、従来のロクロ「かわらけ」の存在の意味、そしてそれ以前のロクロ土師器皿と坏の大小器形の成立を前提として考えるべきあり、主従関係を宴会の席で確認する行為は院政期以降の「家」の成立を前提に行なわれていた［伊東 2012；野口 2012］。在京武士の存在なども視野に入れて、なぜ京都の手づくねを真似る必要があったかを考えるべきなのである。

平泉・東北地方

飯村均も平泉の「かわらけ」は非日常的儀礼で使用されたと説いている［飯村 1998］。柳之御所跡に発見され、松本が素掘り遺構と称した井戸状遺構を廃棄遺構に規定し、それが自己完結的空間である堀内部地域に限定して発見されることに注目する。廃棄遺構から出土する「かわらけ」は堀内部の柳之御所で「かわらけ」を使った宴会儀礼が行われていることを示すものとして、廃棄遺構とその立地点に注意を喚起する。

福島県域でも手づくね「かわらけ」は出土するが、京都の中世土師器皿の模倣に留まらず、山茶碗が模倣された出土例をもとに手づくねの存在意味を考察している［中山 1992］[27]。

小結

食膳具から煮炊具までを土師器で応じた畿内でも鋤柄が指摘したように瓦器椀が非日常品として見なされていた可能性があり［鋤柄 1998］、また橋本も山茶碗に同様の見解を示している［橋本 2015］。他方、京都・洛内は「器種別分業」と「中遠距離交易」によって土師器は皿形態に収斂し、「特定製品」の「大量生産」によって製作・使用された。そうした中世土師器皿が年中行事や宴でも消費された［森 1993b］。中世京都の素焼土器である土師器皿は日常品であると同時に宴会＝儀礼でも用いられた。

洛外や畿内以外の地、とくにロクロ土師器や土師質土器を儀礼用途で用いていた地域の人々は、京都での宴で使用される中世土師器皿も土師器質土器の坏や皿と同一の用途のものとの認識したことであろう。そして、中世土師器皿を京都の宴会儀礼の器と認め、導入を欲したのである。

かわらけをめぐる名称論議と存在の意味

これまでに鎌倉、京都、平泉での古代末から中世にかけての素焼土器皿・坏が現れる過程とその展開をみてきた。そのなかで鎌倉や平泉など東日本の手づくね「かわらけ」が出現する時期の年代とその導入経緯が重要な意味をもっていたことが理解できた。その意味や経緯を理解できれるならば、東日本での「かわらけ」の存在意味と中世社会の理解にとって大きな進展が期待できるとともに、その編年の確立はその経緯をたどる目途となろう。また、「かわらけ」という名称そのものに、中世社会の特質を示す意図が付与されていることを、所々で垣間見てきた。以下では「かわらけ」と中世土師器皿、そして土師質土器の名称について若干考えておきたい。

土師器・土師式土器

土師器の名称は、『令集解』や『延喜式』に記載された名辞によるが、『土師式土器集成』の著者の一人である大塚初重は、土師器の名称は『延喜式』に見え、平安時代には「土師器はじのうつわ」とよばれたのであり古墳時代から奈良・平安時代までの素焼土器をさすとした。もう一人の著者である杉原壮介は「土師式土器」の様式名を以て古墳時代に限定使用した［大塚 1978］。岩崎卓也は研究史をたどり、代表的意見を紹介しながら各研究者がどのように土師器の名辞を規定していたかを示すも、結論として「語源的には歴史的名辞ということであるが、考古学的には古墳時代に始まる素焼土器をさす、あくまでも学術用語なのである」［岩崎 1998：14］としている。すなわち、土師部や『延喜式』に記述があるとかの論議ではなく、学問的にはすでに古墳時代以降の素焼土器を指す用語であるとの

ことだ。しかし、どこまで下る素焼土器を対象としているのだろうか。江戸時代の焼塩壷も土師器といえるのだろうか。おそらく大方がそれを是とはしないであろう[28]。

やや遡るが、田中琢が1967年に『日本の考古学』歴史時代編を著した中で「木の葉技法」から「左手技法」を例にあげて、土師器の製作技法における簡略化を指摘している。近世の灯明皿に極限までの簡略化を認めたうえで、それらを「かわらけ」と称している［田中1967］。

他方、土器様式としての土師式土器の設定が求められた一つの要因は、弥生式土器との差を求めるなかで示された土師器の「斉一性」や新たな「社会・文化」の提示という側面があった。そうした土師器に内包された社会・文化の到達点が律令制社会であったと考えられよう。その場合、土師器の名称を持った素焼土器は、律令制の弛緩とともに、新たな社会・文化によって新たな土器様式に生まれかわろうとするのではないだろうか。それが「中世的土器様式」である。しかし、宇野の示す「中世的土器様式」は、あくまでも「古代的土器様式」との対置によって成立するものである［宇野1984；鋤柄1998］。そうであるならばなお一層土師式土器でなく学術用語としての土師器の使用下限が課題となってこよう。

様式としての土師式土器ではなく、土師器を古代の素焼土器として用いるとした大塚の言葉は卓見であったといわざるをえないが、それゆえに「土師質」なる言葉が「中世的土器様式」のなかの素焼土器に対して用いられるのであろう。だたし、「京都産」の中世土師器皿に「土師器」を充てることは、これまでにみてきた「古代的土器様式」からの延長の器として是といわざるをえない。中井が「時代上の定義、そして手づくね成形という旧来の枠組みをどう評価するかにかかっている」［中井2011：21］（傍点は筆者による）と指摘しているように、中井が用いる中世土師器とは、田中が示した製作技法の簡略化、省力化という土師器伝統のなかで中世に作られたものであるという意味が込められている。しかし、関東地方をはじめとする東日本や畿内を除く西日本においてもロクロ利用の土師器または土師質土器とよばれる素焼土器が古代末に現れる。田中は東日本のそれらに先進性をみる一方で、畿内の「土師器」に対して「生産組織の硬直性と技術的な保守性」［田中1967：199］とまで指摘していた。それが的を得たものであるか否かは別にして、東日本の「中世的土器様式」または「食器様式」の素焼土器に「土師質土器」を自明的に中世素焼土器に用いるのには躊躇をおぼえる。

ロクロ土師器・土師質土器について

田中が早くに概説書でも取り上げたロクロ土師器とは、関東地方でいち早くに認識され、その後東日本各地の9世紀後半以降の諸遺跡で発見される回転力を利用した土師器とされるものである。研究者の認識によって、土師質土器や須恵系土器、須恵系土師質土器などの名称でもよばれる回転力を利用し、黒斑などを体部に残さないために窯のなかで焼かれたことを示唆している土器である。器面の状況は衰退期の酸化焔焼成須恵器の系譜を示している。ただし、器形は須恵器のそれとは異なり、より土師器のものである。服部敬史はこれらを一時期「土師質土器」と称していたが［服部敬史1982］、後年列島規模での歴史研究における統一概念の必要性から11世紀後半以降の坏と皿の大小法量セットの出現以降に土師質土器を用い、それ以前の回転力利用土器で器種構成がより多様な土器群をもってロクロ土師器に名称変更している［服部敬史1986］。このロクロ土師器の名称であるが、［服部実喜1988：註10］が比較的端的にその規定を行なっている。服部敬史が名称で迷ったように成形と焼成では須恵器の系譜を引き、省力化した整形と器形は土師器の系譜を引いている。それは、それまでの工人組織に変容をきたしているだけでなく、系譜も土師器とは異なる可能性があるなど多々異論がある。それでもロクロ成形および成形後無調整で酸化焔焼成をおこなうという属性をもつ土器類の総称としてロクロ土師器の名称が一般化している。

他方、回転力を利用した土器については鋤柄が時代区分の観点から考察している［鋤柄1998］。鋤柄は東日本で研究を進める福田健司のロクロ土師器に対する理解を援用する。福田はロクロ土師器を須恵器系土師器と規定する立場だが、8世紀前半代から10世紀後半までの須恵器坏の模倣の時期とそれ以降の木器・緑釉陶器・灰釉陶器・山茶碗等を模倣する時期とに分けている［福田1986］。鋤柄は、底部糸切りが行なわれる後者を前者から分別することを主張し、ここに古代的土器様相の終末と中世的土器様相の始まりをみてとろうとしている[29]。すでに前項で見てきたように、西日本においても同様な模倣系の土器が存在し、底部糸切りの土器埦などがみられるが、一貫して鋤柄をはじめとして多くの研究者は土師器の名辞を使用し続けている。

さて、ロクロ土師器、そして器種構成の単純化と大小の坏と皿が現れた土師質土器の坏が東日本の「かわらけ」へと変容していくであろうことを東日本の中世土器研究の項でみてきた。かつては古代末と鎌倉期との間の11世紀から12世紀の資料が欠けていたため、変容の実体については予想に留まっていたが、近年次

第にそれらの時期を埋める資料が見出されるようになってきた。実際の資料は次号にて示すが、工人組織や系譜に前代と異なる状況が窺える土師質土器の延長に生み出される「かわらけ」を列島規模の統一概念の必要性から中世の土師質土器にしてしまってよい理由がみあたらない。

他方、京都の中世土師器皿の模倣やその影響から生じた中世土器が土師質土器と規定されることがある。本稿では服部実喜にそれをみてきたが、他地域の研究者にもみることができる。その場合、ロクロ作りの土器皿を指すのが一般的で、東日本では手づくねに限って京都系とすることが多い。

かわらけ

以上に中世の素焼土器に中世土師器や土師器の名称を与える論議をみてきたが、それに対して東日本の多くの研究者がなぜ「かわらけ」を用いるのであろうか。まず［服部 1992］は「Ⅱa 期に始まるⅠ群の内面調整（内面外周 → 内底面の横ナデ）は、当該期以降の土師質土器に一貫してみられる基本的な成形技法である。（中略）この段階において始めて古代的な属性が払拭され、いわば「かわらけ」と呼ぶにふさわしい中世土器に転換した」［同上：160］と記していた。ここでは「土師質土器」と「かわらけ」が同時に用いられている。古代末期以降の土器に「土師質土器」の名称を与えているのは解るが、その内の中世のものを「かわらけ」と指している。文字面をあげつらっていると思われるかもしれないが、服部の用語法が揺れているのが解る。これより後の論考では「土師質土器」で統一されており、先の服部敬史と同様の理由による変更であろうと察せられる。「かわらけ」なる用語が東日本、鎌倉地域の調査研究者によって用いられてきたために、当初は「かわらけ」の用語を用いていたのであろう。

「はじめに」で記したように中世考古学に早くから取り組まれてきた赤星直忠の影響が鎌倉の調査では大きく、その後も奥田直栄、大三輪龍彦と「かわらけ」を中世の素焼土器に対して充てきた。そうした下地のもと、東日本における「かわらけ」が特異な性格を有するとの見解を理由に土師器や土師質土器を用いない研究者が多くいる。その理由は、ほぼ一致している。前述の繰り返しになるが、そのいくつかをみておこう。

「平泉に手づくねかわらけが入ってから後の土師器について、製作技法の違いにかかわらず「かわらけ」と呼ぶ。（中略）あくまでも独特の儀礼的な使用が行なわれた場所である。したがって、製作技法が古代において一般民衆の使用した通常の食膳具と連なるものではあっても、使用形態が異なることになる。使用形態が異なるということは、その器に与えられた意味が異なるということである。したがって、ここでは使用のあり方から対象の呼び方を決めることにして、東北北半部における手づくねかわらけの出現以降、特定の場所において存在する土師器を「かわらけ」とよぶことにする」［松本 1992：註 1］（傍点は筆者による）。ここでの特定の場所は柳之御所であり為政者・統治者の居所を指しながら、儀礼的使用法を強調し、さらには製作技法が古代以来のもので民衆も用いるものと同じでありながらも非日常的器であることを強調している。

鎌倉で調査を続けた河野は、「大小の皿形土器であるとはいうものの、それは供膳形態のみをもたされるものではなく灯明皿にも使用されるし、墨書を加えて呪物にもなる。また供膳機能とても、宗教的行事や会食など非日常的機会に、多量に消費され（中略）、洗い直して日常的に使われることは少ない（後略）」。「こうしたことは土器論の中では、消費者側の行為ということで見過ごされやすいが、実はそういった消費のさまざまな様態を見越して、それに量的に対応し、素焼で未使用という清浄さを維持する保守的な生産体制があったことを考えねばなるまい。かわらけが必要とされるような機会が多くあるところには多く供給され、必要の少い所では少量を搬入するにすぎないということである。これは古代の土器とは決定的に異なる点である」［河野 1986a：192-193］（傍点は筆者による）としている。少し長く引用したが、儀礼的場、非日常空間での使用を主な用途とする器であることが第一の要点であると同時に筆者が傍点をふった箇所が重要であろう。すなわち、考古学研究における出発点である遺物にみられる製作者側の痕跡に留まらず、使用者側の痕跡（使用痕）について、器に付いている使用痕だけでなく、使用する場・空間の他に誰と使用し、どのように廃棄されたかの痕跡から使用者が器に対してどのような認識をもっていたかまでをも視野に入れた土器様式の理解のもと、必要とされる場にのみ供給されるという古代の土師器とは決定的に異なるとして、「かわらけ」の用語を用いるとしている。後半の文言は「器種別分業」、「大量生産」、「存地生産と中距離交易」によって必要とされる場に器が供給されるとした宇野や広瀬が指稿した中世的土器様式を思い起させる。

「かわらけ」を大量に使用して廃棄する行為は東日本だけでなく中世京都にもみられると百瀬は指摘する［百瀬 1998］。それは鎌倉時代中期頃に「完形品を多量に廃棄した遺構は奈良、平安時代の都市遺跡にも見られるが千個体を越すような大規模な土器廃棄遺構は存在しておらず異常な土器の使われ方が行われている。このような多量の土器の完形品かそれに近い形で処理するのは平安時代後期になってから起こり、以後

近世まで続く」［同上：4］と、中世京都でも日常品としてではない使用法の存在を指摘している。同様に瓦器埦の非日常性についても［鋤柄 1986］が指摘しているように土器という素焼の器全体に対して向けられた意識であったかもしれない。

土師器皿・かわらけの用途と特質

瓦器埦に非日常性を推測した鋤柄は、京都での使用法と京都以外の京都系土師器皿・「かわらけ」を検討して中世土師器皿の非日常性を否定している［鋤柄 1999、2002］。鋤柄の論旨は京都でも確かに大量廃棄の儀礼はみられるが、それらが発見される状況や遺構との関係を整理して、日常的な場でも使われていたことをも示しており、一概に儀礼のためのものとはいえない。さらに大量廃棄が文献記録に現れる供宴と関連づけることも可能であるが、大量廃棄は 14 世紀から 15 世紀にかけての時期に多く、京都の土師器皿が褐色系から白色系（C 類）へと系統を転換する時期にあたり、古代以来の土師器の系譜に変化が表れる時期との関連を指摘する。京都の土師器皿について鋤柄はつぎのようにまとめる。「儀式におけるかわらけの役割が決して少なくなかったことが知られる。元来機能と用途は個を規定する別次元の概念である以上、小型低器高の容器である土師器皿が日常容器として使われる以外に、儀式にまじないに使用されたとしても別に問題はない。議論が生ずるとすれば、用語へのこだわり以上に、それらの用途を重視して、それを土師器皿の生産の主要な目的または、食文化におけるかわらけの位置とする見かたに対してである。（中略）中世都市京都の土師器皿においては日常容器としての機能の喪失は考えられず、土器碗が特殊品であった可能性はともかく、「かわらけ」のもつ特殊品としての性格が同じ意味で考えられるかは、未だ議論の分かれるところである」［鋤柄 1999：417］。続けて鋤柄は「中世京都の土師器皿は出土する土器・陶磁器の中で定量的に中心の位置を占め、時代が降ることにより容器としての機能の劣化がなく、形態変化も連続して認められる。（中略）国産陶磁器が日常品として定着する江戸時代以後、土師器皿は生活具としての機能が不用となり、用途が限定され、伝統の形を重視するために形態は不変であることが求められたのであろう」［同上：420］ともいう。鋤柄は前掲の引用で、日常品であっても、なかには儀礼にも用いられたとして、器の機能と使用法は別次元と考えるのだが、江戸時代についてその考え方を適応せずに自己矛盾をおこしている。このように器本来の機能とそれを用いる側の論理は鋤柄のいうように別次元のものであるのだが、用いる側の論理こそが時代を映し出しているのではないだろうか。［河野 1986a］はこのことをこそ指摘している[30]。

また鋤柄は中世土師器の用途・機能を日常品とした前提にたち、［河野 1986a］などが指摘する京文化へコミットするための「かわらけ」論理について、東日本の社会が京文化の何を受け入れるために手づくね「かわらけ」を導入したのかに疑問を投げかけて、旧御射山遺跡（長野県霧ケ峰所在の諏訪大社の摂社）の事例を挙げながら時代を先導する寺社の存在を介して京都型土師器皿が伝播したのであって、京都と平泉を比較する場合も鳥羽離宮と柳之御所という次元で行なうべきであるとする［鋤柄 1999］。確かに鋤柄のいうように漠然とした地域間の比較では何も見えてこないであろう。

飯村は 900 年代の陸奥国府前面の「国司館」での素焼の土器溜まりの発見から説き起こして政治的儀礼の場での土器の使用例を平泉・柳之御所での「かわらけ」の大量使用と大量廃棄との連続性を示唆していた［飯村 2004、2009］[31]。そのなかで飯村は「「手づくねかわらけ＝京都志向」とは言えないことを、再三指摘してきた。（しかし、）それは表面的なもので、内在する論理は東国なりに読み替えられた論理であると考えている。実際、柳之御所跡出土かわらけを見ると、ひっくり返して糸切り痕を確認しないと、ロクロか手づくねか分からないのである。柳之御所跡で宴会をした人たちは、折敷の上に乗ったかわらけをいちいちひっくり返したであろうか？それほどの意識はあったのであろうか。発注者側・生産経営者の論理であろうか？」［飯村 2009：63-64］（カッコ内は筆者による）と指摘する。やはり本稿でも再三指摘し、また筆者も［宗墓 1998］で述べたように京都の中世土師器を導入した東日本の側の論理が京都の研究者には欠けているのではないだろうか。導入する側が中世土師器に何を見、それを東日本の社会の中にどのように入れ込み、どのように用いるのかの視点である。すなわち京都の中世土師器に対する導入側の認知の仕方であり利用の仕方を問題としているのである。

中世土師器皿の伝播と受容をテーマに掲げた会合が 1998 年中世土器研究会で催された。伊野が成形と年代をもとにタイプ分類し、整形技法から細分した京都産土師器皿を指標として［伊野 1998］、各地からの報告がおこなわれた[31]。伊野は京都以外の地で製作された中世土師器を 1 次から 5 次模倣までを設定して京都からの同心円的伝播と平泉や鎌倉を二次センターとしての同心円も想定した。各地から伊野の分類をもとに報告されたが、飯村が「新興権力者である奥州藤原氏が、京文化を相対に置きながら、独自の価値観を付与した結果と考えざるを得ない」［飯村 1998：25］（傍点は筆者による）と上掲論考へと発展させた。この他

に［松本 1998］や［宗臺 1998］が東日本での中世土師器の「かわらけ」への読み替えを指摘していたが、［中井 1998］は「受容にあたってどのような点に〈京都らしさ〉を求めていたのかという受容意識の問題について考えてきた」［同上：137］と記して受容者という言葉を使って導入者側の論理を窺おうとしている。しかし、言葉をあげつらうようだが、“受容者”と“導入者”の言葉の間には非常の大きな隔たりがある。受容には給付を対置し、渡す方に力点を置いているのである。導入の積極的であり、主体的意味が薄いように思われる。

導入側の論理

研究史の項で見てきたように、東日本のとくに坂東では鎌倉期以前に手づくねを導入した館跡がいくつか見られ、鎌倉期に入ると大量の手づくね「かわらけ」が用いられた。その手づくねの皿形土器の導入以前から東日本ではロクロ整形の土器皿・坏が登場していたのであり、新たに手づくね成形の土器皿を導入する理由が存在していたはずであり、その様態こそが時代を映し出している。

平泉の「かわらけ」を扱った松本は「生産者と使用者が異なる場合は、生産者が使用者を規制する場合と、使用者が生産者を規制する場合があることになる。かわらけの使用に関しては、使用者が生産者を規制したと考えることができる」［松本 1992：46-47］、さらに「かわらけ大量使用は（中略）単に平安京の貴族の生活を踏襲したのではなく、イデアとして想定されていた」[33]［同上：65］としている。飯村も指摘する京文化の読み替えをへて、導入される論理を示していた。他方、全く逆の視点から導入する側の論理を工藤清泰が指摘する。

「中世段階で「かわらけ」という土器にのみ日本的土器文化を移入する現象は、地域的・階層的差異を有しながらも列島的に進展することは考古学的事実である。（中略）北奥から北海道にかけての中世社会（13世紀後半以降）は、特殊な場合を除き「かわらけ文化」までも消滅すること（搬入された土器の消滅ではない）に考古学的特色がある」［工藤 1997：128］とする。奥州北部から北海道にかけての古代から中世成立期を見極めようとするこの見解は、「かわらけ」を手づくねに置き換えることで、一旦は導入しながらも、後にそれらを用いなくなる東国社会が平安王朝の権威を払拭した東日本中世に敷衍できる論理となり、戦国期の後北条氏が再び手づくね「かわらけ」を用いはじめるというてづくね「かわらけ」の性質をよくあらわしている。

河野や松本が提示する使用者側の論理は中井の「「技術」とは〈生産者の論理〉であり、「機能」とは〈消費者の論理〉といえるかもしれない」［中井 2011：36］という消費者がそれと認識できれば良い消費者側の手づくねに求める志向性を指摘するものと共通する。では何を志向したのだろうか。

前田清彦は10世紀以降に顕著となる土器の大量廃棄を鋤柄と同様に遺構との関係から類型別に整理し、いずれの類型でも土師器の椀や小皿の無台器種が中心であること、そして大量廃棄が行なわれる場所の建物が大きく、複数になるに従って、無台器種が増加することを確かめた。無台器種の増加は須恵器生産の解体と土師器の在地生産の顕在化を背景にしているが、土師器皿の日常食膳具としての位置づけだけでは語れない祭祀との結びつきを指摘した［前田 1997］。前田の論考でもう一つ重要な点は、村落を形成する単位集団＝家の自立化を大量廃棄と建物の関係から探っていることである。家の成立は文献史家が説く中世社会の指標である。

前田の示した祭祀と無台皿との関連を器に認められる象徴性と認知の側面から考察を進めたのが田中　信である。田中は色の社会的意味を探り、「主に白－青、白－赤の関係に絞り、（中略）上／下、ハレ／ケの関係について考えてみた。（中略）この場合の赤、つまり土器は、全体性としてのケ、「日常」を意味しない。あくまでも儀礼や饗宴という「日常」と隔絶した「非日常」の時空間の中でのケ、黒に象徴される「日常」へ向かう途中の意味のケである。すなわち、赤に象徴される土器とは、本来の「日常」に戻る上で、通過しなければならない境界、リミナリティーにとって必須の道具であった」［田中信 2006：625］[34]と捉える。こうした平安京、中世京都における土器の扱いを大臣大饗に出席した武士たちが東国に持ち帰った可能性も考えられるが［野場 1988、1997］、田中は「かわらけ」の使用と廃棄について「清浄性が保持されたのは、それが使用されていた非日常の時間と空間だけで、捨てられて日常に戻れば、清浄な器としての意味はうしなわれていたと考えられる。京中から出土する多くのかわらけに、廃棄後、特別な器として取り扱われた形成が認められないのは、そのためであろう」［田中信 2016：185］[35]とする。さらに続けて「大量のかわらけを一回で使い捨てる特殊性は、その対立項の日常食器の存在があって成立できている」［同上：187］と記して、中世土師器の日常的使用と矛盾しない解釈を与えている。こうした解釈は人の死に際して行なわれる属人食器を割る習俗に端的に見られることからも符合性が高いとする。

このように「かわらけ」が一度きりの使い捨てを前提とすることで聖性を帯びて非日常的性格を得たので

あり、儀礼に用いられるものとしてその量は問わない。宗墓などが指摘するように職能民居住域でも「かわらけ」を用いた儀礼は成立することになる［宗墓 2008、2009 他］[36]。そして、田中が指摘するように捨てられれば日常に戻るとする考え方に拠れば、特殊な廃棄遺構（平泉の井戸状遺構）とされる穴は単なるごみ捨て穴であり、何度もゴミが捨てられたことを想定すべきであり、そうした遺構出土遺物を一括廃棄の共伴遺物として扱うことに疑義を投ずることになるが、どうであろうか。

主従関係確認儀礼

「かわらけ」を用いた儀礼、とくに東日本での儀礼とはどのようなものであっただろうか。それは前田が指摘した家の成立を前提に主従関係を確認する飲食儀礼であったと考えている［原田 1997］。荒川正夫は土器陶磁器の組成グラフをもとに武家本貫地での「かわらけ」の使用量が少ない一方で、寺院遺跡の出土量の多さを指摘し、在地領主は古代以来の地縁・血縁関係が強い主従関係を結んでおり、多くの御家人・給人・所従が集る鎌倉に比べるならば「かわらけ」を使った儀礼の必要性が低かったとする。むしろ在地では「人と神仏」との関係を重視して飲食儀礼がおこなわれたのであろうと推測する［荒川 2003］。荒川の見解は地縁関係が薄れ、社会的階層が重層的にからみあう都市において主従関係の確認礼儀が行なわれていたことを前提としている。そうした主従関係確認の行為が京都でも頻発していたことを窺える。

中井は「ことに酒宴の食器に関する名称は、15 世紀にめだって増加する。（中略）15 世紀を中心に（京都で）酒宴の回数が増加し、それが日記に記載されるほどの関心事になってゆく動向の一端を反映していることはまちがいない」［中井 2011：70］（カッコ内は筆者による）と指摘し、鋤柄は集中的に中世土師器皿が出土する遺構は 14 ～ 15 世紀に増加することを示している［鋤柄 1999：419］。京都における中世土師器皿の急激な使用量の増加に対して、中井は武家儀礼や供宴であったとし、鋤柄は中世土器の質的変化、特殊な使われ方を先に示した瓦器とともにみることが可能であると評価する。筆者はかつて、中世京都で 14 世紀以降に急激に「かわらけ」の増加を示す鋤柄が作製したグラフ［鋤柄 1994］を参考に、鎌倉幕府倒壊後の南北朝から室町幕府の時代に関東武士をはじめとする武士の在京制・不在領主制によって東日本の「かわらけ」を用いる儀礼が京都に及んだと指摘したことがある［宗墓 1998］。その当否はここでは擱くとして、京都および畿内における中世土師器皿の使用法と「かわらけ」の使用と東日本の人々の「かわらけ」に対する認知に大きな隔たりを想定する筆者は、以後「かわらけ」の括弧を除いて記述していく。

おわりに

次号において、上にみてきたかわらけのもつ意味を探るための手順として、鎌倉出土かわらけの分類を器型把握に努めて行ない、それらを伴出遺物、共伴遺物、そして出土遺構から年代を比定したい。それをもとに中世社会の成立とその変容の姿を探ることとする。その際に要点となるのは、古代末の土師質土器とその系譜を引く最初期のロクロかわらけ、そして手づくねの導入および消失、さらに器高の高い中型をふくむ大中小法量をもついわゆる「薄手丸深」器形出現についてである。最初期のロクロかわらけが後のかわらけとどのような系譜上の異同があり、また工人集団と生産体制に変化はあったのだろうか。この点については筆者の編年におけるⅠ期とⅡ期をⅠ期の前後半とする必要もあるかもしれない。また、「薄手丸深」器形と中型の出現は、それまでの法量組成と全く異なるため、新たな工人集団の登場を想定すべきなのか、社会的要請によるものなのか、大きな課題となる。

註

1) 筆者もその影響を強く受けており、論の組み立て直しを迫られている。
2) ここでの食器はいわゆる食事を摂る際に用いる食膳具のみを指していない。宇野がかつて古代的食器の変遷を探る論考で述べたように、食料を得てから食事を済ませるまでに利用した器物の総称として用いる［宇野 1985：4］
3) 古代末期に東国全域にロクロ土師器の同一器形が見られ、それらが木器・漆器の影響によるとの指摘を浅野が行なっている［浅野 1991］。また、漆器の出土はその遺存条件に大きく左右されるために、13 世紀以降の類例であるが、中世鎌倉から出土するかわらけと漆器の器形の相関性が強く指摘されている［大河内 1993］。
4) 服部はⅠ期の土器・陶磁器様相を探る際に取り上げた千葉地東遺跡の調査成果について、後年調査担当者であった服部自身から層位的調査ができなかったと聞かされた。そのため最下層の遺構である河川 4 の覆土下層資料は利用できても、その他の資料は参考にとどめおくことが良いと指摘された。
5) J タイプについては註 32 を参照のこと。
6) 本文中で用いる「変化」と「変容」の用語の意味は、言わずもがなであると思われるが、「変容」については姿形の変化というよりは主体者の能動的変化の色合いが強いと考えられる場合に用いている。［アーヴィング・ラウス（鈴木公雄訳）1974］での「文化変容」の用法を援用して用いる。
7) この一文からは服部がこの段階まで［服部 1984］で指摘し

た内型による手づくねの成形技法を想定していることがわかる。

8) 河野の論考とほぼ同時期に刊行された［広瀬 1986］と［宇野 1985］を踏まえた言葉であるが、傍点を振った部分は古代とは異なる状況と器物であることを強く指している。「かわらけ」は土師器ではないと。

9) この「薄手丸深」器形については、鎌倉市内調査をおこなう調査員にあってもしばしば類似品を「薄手丸深」としていることがある。

10) ここでの「土師質土器」については、［服部敬史 1982、1986］に述べられているように、古代ロクロ土師器の後半段階を指しており、京都や西日本で用いられている中世土師質土器皿とは異なるのだが、このあたりの用語の問題は後述する。

11) 馬淵の論考では「かわらけ」を土師器と表現することもあるが、一定ではない。またその成形技法差を、吉岡に倣って手づくねを T 種、ロクロを R 種と呼ぶ。

12)『建長寺伽藍指図』は元弘元年（1331）に東福寺大工越後某が建長寺の伽藍配置を指図として書き留めたものだが、そこには永仁元年（1293）の建長寺炎上によって失われた法塔が再建された姿で描かれている。この指図に描かれた建長寺の伽藍は、現存の伽藍配置と軸線が異なっている。1986 年に行なわれた現在の法塔周辺の調査において、火災後の法塔が創建当初と同じ場所に再建されたことが判明し、嘉暦二年（1327）に法塔立柱がなされた再建時の四半敷が発見された［川添武胤 1959：276-278；河野 1991］。

13) ここでの土師質土器は中世の土師質土器ではなく、東日本の古代末期のロクロ回転を利用した土師器をさす用語である。これらの用語については、本文中で後述する。

14) 中井淳史は宗墓が鎌倉の手づくね「かわらけ」について平泉のみからの影響であったかのようにとらえているが、宗墓の見解とは異なる［中井 2011：354］。

15) 馬淵が京都を平安京とする要因は、氏の「かわらけ」編年では手づくねが鎌倉幕府以前の 12 世紀中頃に遡るとするためだろうか、中世都市の京都ではなく古代の平安京を意味しているのだろう。たしかに関東各地の城館跡からは 12 世紀中頃の手づくね「かわらけ」の出土が報じられている［浅野 1988、1991］

16) 伊野分類に器形ごとの生産地が示されているが、この器形と生産地の関係を横田もまとめている［横田 1988］。「(A タイプとする褐色系）はそれまでの土師器の系譜を引くもので胎土は茶褐色～赤褐色を呈する。11 世紀ごろに「粘土紐づくり」から「円板折り曲げ」に手法が変化し確立したものと考えられ」［同上：81］るものと、「B タイプ（白色系）系は 13 世紀中頃には生産が始められる。胎土は、13・14 世紀 (B1) は素焼の土器としてはきわめて白く、精良である。以後徐々に褐色味を帯びるようにな（中略）り、A タイプ同様、大皿・小皿の二種のみとなっている」［同上:81］（カッコ内は筆者による）の二系統とする。そして、土師器皿の生産地として、現在の JR 山陰線嵯峨駅の北約 100 mほどの所にあり、古くは「深草」と呼ばれていた八軒をあげ、「この深草とは中世において土師器皿（かわらけ）の代名詞として使われており、「深草」つまり土師器皿を生産する地としてこの名が付けられていた」［同上：79］とする。さらにその地名由来の本となった深草村とは『醍醐雑事記』久安五年（1149）に記載のある「深草四丁町」と「深草前瀧田」がそれぞれ土器を毎月三百五寸重、毎年七百五重づつ地子として貢納していたことが記されている今の深草のことであるとする。「12 世紀における深草の土器生産は荘園領主である醍醐寺などに地子として土器を貢納する他に商品生産を行ない、京都に向けて多量の土器を出荷していたようで、中世の荘園制における生産工人集団の色合いを強くしている。このことは脇田晴子氏もふれ、工人集団と権門領主の散りがかり的支配従属関係などをさぐっている」［同上：79］と述べている。そして、「嵯峨が B タイプ系（白色系）の生産地として上がってくる。八軒とそこから派生したとされる幡枝の近辺で検出された推定窯跡の出土遺物が B2・B3 タイプで、また最近まで木野で作られていた土師器皿が B4 タイプであることなど（中略）八軒（嵯峨）→ 幡枝・木野の一連の生産地では、B タイプ（白色系）が生産されていたと考えるのが、無理がない［同上：82］（カッコ内は筆者による）と器形と胎土さらにここでは触れられていない整形技術から分類された各タイプと生産地とを結びつけた試みを行なっている。

17) 橋本は漆器椀の存在を前提に山茶碗の非日常性を視野に入れるべきとする。ただし、鎌倉では使用による磨滅もあるとする［橋本 2015］。こうした見解は「かわらけ」をめぐる京都や畿内と東日本地域との認識の差と表裏の関係にあることを指摘できよう。

18) 東北地方の黒色土器については木本元治が黒色土器 B 類類似が 10 ～ 11 世紀に成立し、古代末の時期に西日本と共通する様相の黒色土器を東北地方でも製作されたが、これが瓦器埦生産へと移行しなかったのは、東北の地方色とする。12 世紀には畿内型の（手づくね）かわらけの生産が認められるのに対して、黒色台付き埦は認められず、完全に黒色土器は姿を消して古代的土器生産が終了し中世的土器埦成立にも向かわなかったとしている［木本 1991］。

19) 仲田茂司は東国の古代から中世への木器の展開を樹木選択、製作法（柾目、板目）、木器の分類と変遷、器種構成の検討から土器と木器の変遷を照らしあわせ、8 世紀後半の食膳における土器と木器の役割分担を探り出す。他方、10 世紀以降赤焼土器の出現は小皿の出現とともに土器坏を客体的な存在に押しやるとして中世への移行をみ、この時点で漆器が登場するとみる。この仲田の見解を是とするならば、東日本のロクロ土師器やロクロ「かわらけ」初期の形態が台状底部をなすのは木器の形態を写すからだろうか。

20) 13 世紀中ごろ以降の鎌倉では、海浜砂丘一帯、とくに現在の由比ヶ浜地域に漁撈民や獣骨解体、皮革加工、銅細工などの職能民が多数居住し、同時に多くの倉庫も建ち並んでいた複合産業地域であったが、建物内やその周囲から完形の「かわらけ」を遺棄した遺構が発見される［宗墓 2008、2009］。他方、建武元年または二年（1334）の『浄光明寺敷

地絵図』からは武家地が給人に貸し出され、さらに又貸される土地の存在が確かめられて、貴賤雑居の密集都市では、いわゆる「かわらけ溜まり」といわれる「かわらけ」の廃棄状況から都市民が「かわらけ」を用いた飲食儀礼を行なわなかったとはいえず、むしろ頻繁に行なっていた可能性がある［保立 1990］。

21）「かわらけ」の製作・焼成を含めて、12 世紀～ 17 世紀前半までを 5 期に分け編年を行なう。

22）遺構の前後関係を判断する材料に用いた焼けた陶磁器片の接合関係は、あまりあてにならないのではないだろうか。平安京・中世京都の土師器皿との比較検討では［伊野 1987］の整形技法を参考にしている。

23）鎌倉でも「かわらけ」の口径は次第に小さくなる。折敷などに置く「かわらけ」の数の変化も視野に入れておいて良いかもしれない。

24）宗墓の観察では口唇の面取りは体部横ナデの前に施されるが横ナデと面取りの手順を細かく観察した例はない。また京都産においても横ナデの前に面取りを行う例があるという［中井 2003］

25）特定の儀礼とはどのようなものであったのか松本は示さないが、羽柴は柳之御所 52SE10 出土の小型 74 点、大型 15 点と大小かわらけの数量差を『伴大納言絵詞』や『信貴山縁起』絵巻の描写例を参考に、大型の柱状高台土器は「土高坏」で、上に折敷を置いて使用されたものとし、「大型かわらけは垸飯を盛る容器と酒を注がれる盃の 2 種類の用途、小型のかわらけは菜を盛る容器で垸飯を盛った大型かわらけの周りに放射状に 7 ～ 8 個置かれたと考えられる。そして小型の柱状高台土器は盃として使用された大型かわらけの器台であった」［羽柴 2001：46-47］と解釈した。

26）同様に羽柴もロクロ「かわらけ」工人が手づくねを作ったことを前提にして、手づくねへの希求性が高く、それは手づくねがロクロ「かわらけ」よりもより高位に位置付けられていたと解釈している［羽柴 2001：58］。

27）註 17 の橋本論文による山茶碗非日常品説との関係も指摘できようか。

28）江戸時代の土器については［江戸遺跡研究会編 2001］を参照。そこでは土器の材質と焼成において焼成温度が低く、酸化焔焼成された粘土質材料の焼き上りを指している。

29）時代区分としての中世的土器様式成立の年代については、10 世紀後半代とするものや 11 世紀中頃とするもの、さらに 12 世紀中頃などがある。10 世紀後半とする［井上 2010；鋤柄 1998］、11 世紀中頃とする［橋本 1987a、1990］、12 世紀前半とする［宇野 1984；吉岡 1991］などがある。10 世紀後半とする見解は、古代的土器生産、とくに須恵器生産の終焉とともに器種構成の中世的様相の初現期と捉えている。他方、12 世紀前半とする意見では「特定生産地」による「特定製品」の「大量生産」を可能ならしめた生産と流通・消費の中世的展開を指標とした宇野の見解を上げられよう。11 世紀中頃とする橋本は、灰釉陶器模倣の有高台の減少の他に瓦器埦の登場、それに東播系須恵器鉢や中国産白磁の普及などの遠距離流通を背景とした食器構成をもって指標としている。

30）中井も同様な意見を述べている。「「技術」とは〈生産者の論理〉であり、「機能」とは〈消費者の論理〉といえるかもしれない」［中井 2011：36］。

31）陸奥国府多賀城周辺の「土器溜」の検討は［村田 1994］などがある。

32）伊野の分類は京都の研究史で記したものとは若干異なり、成形を A 粘土紐巻き上げ、B 切り込み円板技法、C 狭義の手づくね、D 型づくり、E 粘土板接合法に分類し、整形を A ナデ、B 横ナデ、C ケズリ、D ユビオサエ、E 型づくりに分ける。A タイプ:10 世紀後半以降の杯形の型式（深草原型）、B タイプ:10 世紀中葉以降の型式で当初は大中小の 3 規格（栗栖野原型）、C タイプ：11 世紀中葉以降のコースター型、E タイプ：小振りで厚手の大小 2 規格で G タイプを生み出す、F タイプ：白色土器の一部（栗栖野？）、G タイプ：坏形の 2 規格（嵯峨？）、J タイプ：12 世紀後葉に確立した口唇部面取り（深草？）の 7 タイプを設定した。研究会ではこのタイプ分けを前提に、J タイプとの異同を各報告者に論じて欲しいとの事前依頼を報告者は受けていた。報告者は依頼に対する異論を抱えながら、何とか各自の意見とのつじつまを合わせて報告した（少なくとも筆者は）。ところが、討論の冒頭に主催する会の会長を名のる人物が、依頼前提を無視して報告者たちに前提そのものが間違っているとの発言をおこなって、報告者（筆者）は憤慨した。以来、中世土器研究会との一切の関係を絶っている。

33）引用した文言から略した部分には、平泉の世界遺産登録を目指して浄土思想の具現化がどのようになされたかの事例として示す見解が述べられているが、そうした文言に付された註に「平安京を平泉に再現させようなどとは、決して思っていなかったであろう。彼らの行為の基礎となっていたのは浄土思想ではなかったか。（中略）決して真似をしたのではなかった。平安京にも実現されていないものを造ろうとしていた」とかなり強く、平安京や京都の文化をそのままに受容するのではなく、導入者の意図に沿うように読み替えがなされていたと主張している。

34）儀式－宴座－穏座の祭式構造との対応に注意したい。また製作の簡便化で日常食膳具としての性格が強い「かわらけ」が田中のいう非日常的儀礼の空間と時間から日常的生活に戻るリミナリティーで用いられるかについては後述する［吉岡 1997］。

35）「聖なる存在、おそらく天皇に付随する聖性にあると理解している。（中略）聖なる存在の天皇の玉体安穏は、都の人々の安穏とも繋がっていた。だからこそ、上下を問わず（上層身分では特に、）頻繁に、それは日常的とも言えるような頻度で、（あくまでも非日常的な節目で）、かわらけを使い捨てるような行事や儀礼を行なっていたと考えられる。（中略）聖なる天皇から周縁に位置する鄙では、物理的・精神的に遠方故にその必要性が低かった（後略）」［田中 2016：186］。そして、「かわらけ」が大量に用いられた鎌倉では、将軍が聖性を保持していたと註で述べる。

36）註 20 を参照。

引用・参考文献

アーヴィング・ラウス（鈴木公雄訳） 1974『先史学の基礎理論』雄山閣出版 .

赤星直忠 1937「鎌倉の考古学的研究（七）「かわらけ」について・「箸」について」『鎌倉』3（1）通巻 8：12-15、鎌倉文化研究会 .

赤星直忠 1980『中世考古学の研究』有隣堂 .

浅野晴樹 1988「東日本における中世在地産土器」『東国土器研究』1：168-169.

浅野晴樹 1991「東国における中世在地系土器について －主に関東を中心として」『国立歴史民俗博物館研究報告』31：55-126.

荒川正夫 2003「中世城館の成立と地域性」『中世東国の世界Ⅰ』81-98、高志書院 .

飯村 均 1998「東国のかわらけ」『中近世土器の基礎研究』13：13-26.

飯村 均 2004「土器から見た中世の成立 －その連続性と非連続性の視点から」『中世の系譜 東と西、北と南の世界』考古学と中世史研究 1：169-178、高志書院 .

飯村 均 2009「平泉から鎌倉へ」『中世奥羽のムラとマチ －考古学が描く列島史』39-65、東京大学出版会 .

伊東瑠美 2012「11 ～ 12 世紀における武士の存在形態（上・下）」『古代文化』56（8）：37-48；56（9）：31-40.

伊野近富 1985「京都北部の中世土器について」『中近世土器の基礎研究』1：22-28.

伊野近富 1987「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集』1：395-408.

伊野近富 1989「12 ～ 16 世紀の京都の土器」『中近世土器の基礎研究』5：115 ～ 122.

伊野近富 1998「中世前期の京都系土師器皿の伝播と受容」『中近世土器の基礎研究』13：3-12.

井上雅孝 2010「平泉かわらけの系譜と成立 －土器から見た「古代」と「中世」の二重構造」『兵たちの生活文化』156-185、高志書院 .

岩崎卓也 1998「総論」『古墳時代の研究』6：211-24、雄山閣出版 .

宇野隆夫 1981「第 3 章 遺物～第 4 章 遺物の考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ 白川北殿北辺の調査』25-76.

宇野隆夫 1984「後半期の須恵器 －平安京・京都出土品にみる中世的様相の形成」『史林』67（6）：66-104.

宇野隆夫 1985「古代的食器の変化と特質」『日本史研究』280：3-28.

江戸遺跡研究会編 2001『図説江戸考古学研究事典』柏書房 .

大河内 勉 1993「漆器とかわらけの器形比較と相関性について」『鎌倉考古』26：1-5.

大塚初重 1978「土師器・須恵器の編年とその時代」『日本考古学を学ぶ』1：211-24，有斐閣選書 .

大橋康二 1979「中世における赤土器・白土器雑考」『白水』7：40-44. 白水会 .

奥田直栄 1976a「土器三題 (その一)」『世界陶磁全集第 5 巻月報』：1-2. 小学館 .

奥田直栄 1976b「土器三題 (その二)」『世界陶磁全集第 14 巻月報』：2-3. 小学館 .

大三輪龍彦 1985『鎌倉の考古学』考古学ライブラリー 32、ニュー・サイエンス社 .

大三輪龍彦 (編) 2005『浄光明寺敷地絵図の研究』新人物往来社 .

川添武胤 1959「臨済宗寺院」「曹洞宗寺院」『鎌倉市史社寺編』199-421、吉川弘文館 .

河野眞知郎 1981「鎌倉における「白かわらけ」の特徴と系譜」『鎌倉考古』10：4-7.

河野眞知郎 1982a「鎌倉に出土する瓦器椀・皿の特徴と系譜」『鎌倉考古』11：4-7.

河野眞知郎 1982b「千葉地遺跡出土の瓦器まね土器」『鎌倉考古』16：2-4.

河野眞知郎 1983「鎌倉に出土する瀬戸内系土師質土器」『鎌倉考古』17：4-5.

河野眞知郎 1986a「鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古』21 シンポジウム 古代末期～中世における在地系土器の諸問題：192-205.

河野眞知郎 1986b「鎌倉の年代観」『神奈川考古』21 シンポジウム 古代末期～中世における在地系土器の諸問題：206-208.

河野眞知郎 1991『神奈川県鎌倉市山ノ内小袋山建長寺境内遺跡 庫裏改築に係る昭和 61 年発掘調査報告書』建長寺境内遺跡発掘調査団 .

河野眞知郎 1992「鎌倉の搬入土器と在地土器」『中近世土器の基礎研究』8：149-164.

木本元治 1991「東北地方における黒色台付き椀形土器 －古代末の土器群との関連で」『中近世土器の基礎研究』7：67-79.

工藤清泰 1997「考古学研究における境界性 －古代・中世への視点から」『青森県史研究』1：145-121.

國平健三 1986「相模国における古代末期の土器様相」『神奈川考古』21 シンポジウム 古代末期～中世における在地系土器の諸問題：67-88.

国平健三 1988「綾瀬市宮久保遺跡出土の中世遺物について」『東国土器研究』1：79-100.

古代学協会 1984『平安京左京四条三坊十三町 －長刀鉾町遺跡』.

斎木秀雄 1980「鎌倉出土のかわらけ編年試案」『鎌倉考古』1：4-6.

斎木秀雄 1983「かわらけ・出土かわらけの編年」『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書・研修道場用地発掘調査報告書』73-95.

斉藤 進 1988「多摩ニュータウン No.692 遺跡出土の遺物」『東国土器研究』1：45-70.

笹生 衛 1989「房総における中世的土器様相の成立過程 －房総における古代末期から中世初期の土器様相」『史館』21：81-108.

宗臺秀明 1992「中世、14 世紀かわらけの変遷」『考古論叢 神奈川』1：82-102.

宗臺秀明 1998「中世都市鎌倉の初期かわらけ」『中近世土器の基礎研究』13：67-81.

宗臺秀明 2002「鎌倉出土の 14 世紀代かわらけ」『神奈川の中

世　～鎌倉から小田原へ～　－土器様相を中心として』11-18. 神奈川県考古学会 .
宗臺秀明　2005「中世鎌倉出土の土器・陶磁器」『全国シンポジウム中世窯業の諸相　－生産技術の展開と編年資料集』295-316.
宗臺秀明　2008「中世鎌倉の都市性」『白門考古論叢Ⅱ』中央大学考古学研究会創設 40 周年記念論文集：203-222.
宗臺秀明　2009「漁撈産業の成立－中世都市鎌倉にみる貝類の獲得と廃棄」『平成 20 年度考古学講座「貝塚とは何か－縄文から近代まで、神奈川の貝塚に見る貝塚観の変移」』73-82、神奈川県考古学会 .
宗臺秀明　2013「都市論議と古代文明形成研究－インダス文明を例として」『文化財學雑誌』8:31-38、鶴見大学文化財学会 .
宗臺秀明・宗臺富貴子他　1996『横小路周辺遺跡　二階堂字横小路 110 番 3 地点　－永福寺関連遺跡の調査』横小路周辺遺跡発掘調査団 .
鋤柄俊夫　1992「土器碗と木器椀」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズ 5：359-369.
鋤柄俊夫　1994「平安京出土土師器の諸問題」『平安京出土土器の研究』古代學研究所研究報告 4：162-224.
鋤柄俊夫　1998「畿内における古代末から中世の土器　－模倣系土器生産の展開」『中近世土器の基礎研究』4：11-85.
鋤柄俊夫　1999『中世村落と地域性の考古学的研究』大巧社 .
鋤柄俊夫　2002「都鄙のあいなか　－中世の京都をめぐって」『古代・中世の都市をめぐる流通と消費　国立歴史民俗博物館研究報告』92：167-225.
鈴木康之　2002「中世土器の象徴性　－「かりそめ」の器としてのかわらけ」『日本考古学』14：71-87.
田中　信　2006「平安朝の饗宴食膳具にみられるカラーシンボリズム　－特に白－青、白－赤について」『吉岡康暢先生古記記念論集　陶磁器の社会史』615-626、桂書房 .
田中　信　2016「中世食器論ノート　－主にかわらけを通して」『亀井明徳氏追討・貿易陶磁研究等論文集』182-192、桂書房 .
田中　琢　1967「(4) 畿内」『日本の考古学』Ⅵ　歴史時代（上）：191-212、河出書房新社 .
手塚直樹・宗臺秀明　2008『文部科学省特別研究促進費　中世考古学の総合的研究　－学融合を目指した新領域創世空間動態研究部門計画研究 C01−1B 日本中世における貿易陶磁の生産と需要の構造的解明　持続する京都・興隆する鎌倉・衰微する平泉　－鎌倉地方資料集成編』.
中井淳史　1998「〈京都らしさ〉のある風景　－「京都系土師器皿」概念の再検討」『中近世土器の基礎研究』13：115-150.
中井淳史　2003「平泉・韮山・鎌倉　－中世初頭の土師器生産に関する二、三の素描」『中世諸職』51-77、シンポジウム「中世諸職」実行委員会編 .
中井淳史　2011『日本中世土師器の研究』中央公論美術出版 .
中田書矢　2003「中世奥羽おけるかわらけの意味」『中世奥羽の土器・陶磁器』303-322、高志書院 .
永田史子　2014「考古学からみた鎌倉研究の現状と課題」『鎌倉研究の未来』49-72, 山川出版社 .
仲田茂司　1993「東国古代の挽物　－食膳における土器との補完関係」『考古学研究』39（4）：97-120.
中山雅弘　1988「福島県における中世土器の様相」『東国土器研究』 1 ：114-125.
中山雅弘　1992「福島県の手づくねかわらけ　－いわき市岸遺跡資料の検討」『いわき地方史研究』29：63-83.
中山雅弘　2003a「総論」『中世奥羽の土器・陶磁器』 9-13、高志書院 .
中山雅弘　2003b 「奥羽における土器の生産」『中世奥羽の土器・陶磁器』279-288、高志書院 .
野口　実　2012「平清盛と東国武士　－富士・鹿島社参詣計画を中心に」『杉橋隆夫教授退職記念論集』：537-546、立命館大学人文学会編、立命館大学出版 .
野場喜子　1988「『兵範記』にみる食器」『名古屋市博物館研究紀要』11：88-124.
野場喜子　1997「大饗の食器」『国立歴史民俗博物館研究報告』71：517-52.
羽柴直人　2001「平泉遺跡群のロクロかわらけについて」『岩手考古』13：41-62.
羽柴直人　2003「平泉におけるかわらけの用途と機能」『中世奥羽の土器・陶磁器』289-302、高志書院 .
橋本久和　1980「中世土器の地域色と流通」『考古学研究』26 (4)：8-16.
橋本久和　1987a「中世の土器　－その成立前後を中心に」『考古学ジャーナル』280：26-30.
橋本久和　1987b「中世土器の製作技法ノート」『中近世土器の基礎研究』3：175-183.
橋本久和　1990「中世成立期の土器様相　－畿内を中心として」『日本史研究』330：36-69.
橋本久和　2004「土器の生産・流通からみた系譜」『中世の系譜　東と西、北と南の世界』考古学と中世史研究 1 ：149-168、高志書院 .
橋本久和　2015「中世土器基準資料の再検討　－瓦器碗・土師器皿・山茶碗を中心に」『中世土器研究中軸資料の再検討＝畿内系土器類と東海系陶器類の並行関係』第 34 回中世土器研究会資料集：1-9.
服部敬史　1982「南武蔵における古代末期の土器様相」『東京考古』1：96-124.
服部敬史　1986「基調報告　関東甲信地域における古代末期の土器様相」『神奈川考古』21 シンポジウム　古代末期～中世における在地系土器の諸問題：1-9.
服部実喜　1984「中世都市鎌倉における出土かわらけの編年的位置づけについて」『神奈川考古』19：171-188.
服部実喜　1985「鎌倉旧市域出土の中世土師質土器　－所謂かわらけの編年を中心に」『中近世土器の基礎研究』1：84-90.
服部実喜　1986a「関東地方における中世土器群の構成とその特質について」『神奈川考古』22：369-394.
服部実喜　1986b「関東地方における中世土器様相」『神奈川考古』21 シンポジウム　古代末期～中世における在地系土器の諸問題：169-175.
服部実喜　1988「関東地方における平安時代後半期の土器様相　－主として関東地方西部地域の動向について」『神奈川考

古』24：157-180.
服部実喜　1992「南武蔵・相模における中世の食器様相（1）－中世初期の様相」『神奈川考古』28：129-167.
服部実喜　1994「南武蔵・相模における中世の食器様相（2）－中世前期の様相」『神奈川考古』30：95-124.
服部実喜　1995「南武蔵・相模における中世の食器様相（3）－中世後期の様相Ⅰ」『神奈川考古』31：83-101.
服部実喜　1996 南武蔵・相模における中世の食器様相（4）－中世後期の様相Ⅱ」『神奈川考古』32：357-376.
服部実喜　2002「鎌倉と周辺地域における南北朝･室町期の土器･陶磁器　－鎌倉編年の見直しを中心として」『中近世土器の基礎研究』16：13-28.
原廣志・宗墓秀明　1996「遺物の編年　第 1 項かわらけの分類と比較　第 2 項かわらけと瓦の廃棄・転用」宗墓・宗墓他 1996：112-120.
原田信男　1997「古代・中世における共食と身分」『中世食文化の基礎的研究　国立歴史民俗博物館研究報告』71：497-515.
広瀬和雄　1986「中世への胎動」『岩波講座日本考古学』6：296-356.
福田健司　1986「南武蔵における平安時代後期の土器群」『神奈川考古』21：43-66.
藤澤良祐　2001「埋納された古瀬戸製品　－特に大型壺・瓶類を中心として」『瀬戸市歴史民俗資料館紀要』18：1-88.
藤原良章　1988「中世の食器・考　－〈かわらけ〉ノート」『列島の文化史』5：59-94.
保立道久　1990「町の中世的展開と支配」『日本都市史入門Ⅱ：町』1-19、東京大学出版 .
前田清彦　1997「土器祭祀類型試論」『北陸古代土器研究』7：73-78.
松吉（平井）里永子　2012「中世鎌倉のかわらけ研究史の視点について」『文化財學雑誌』8:45-50、 鶴見大学文化財学会 .
松吉里永子　2016「鎌倉かわらけ研究史」『鎌倉かわらけの再検討　－大蔵幕府周辺遺跡の一括資料の分析から』17-31、科学研究費補助金「平泉研究の史料学的再構築」.
松吉里永子・押木弘己　2017「鎌倉における貿易陶磁研究の現状と土器研究　－研究史と土器・陶磁器様相の変化を中心に」『第 35 回中世土器研究会　貿易陶磁研究の状況と土器研究』58-108.
松本建速　1992「柳之御所におけるかわらけ存在の意味　－柳之御所のかわらけの系譜と平泉におけるかわらけの出現から見た文化変容の一様相」『紀要』12：45-71、岩手県文化振興財団埋蔵文化財センター .
松本建速　1993「柳之御所跡出土かわらけ編年試案」『研究紀要』13：53-79、岩手県文化振興財団埋蔵文化財センター .
松本建速　1994「ロクロかわらけと手づくねかわらけ」『岩手考古』6：23-33.
松本建速　1995「平泉のかわらけと平安京のかわらけの比較」『紀要』15：73-84、岩手県文化振興財団埋蔵文化財センター .
松本建速　1996「絵巻物に見る器とその解釈」『物質文化』60：46- 59.
松本建速　1998「12 世紀代東北地方におけるかわらけ存在の意味」『中近世土器の基礎研究』13：27-65.
馬淵和雄　1985『鎌倉市二階堂向荏柄遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会 .
馬渕和雄　1993「大倉幕府周辺遺跡　－二階堂字荏柄 38 番 1（No.49）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　9』第 2 分冊：1-144.
馬淵和雄　1997a「付 -1　鎌倉」『中世食文化の基礎的研究　国立歴史民俗博物館研究報告』71：311-330.
馬渕和雄　1997b「中世食文化の諸相　－食器から見た中世鎌倉の都市空間－」『国立歴史民俗博物館研究報告』71：431-471.
馬淵和雄　1998『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社 .
三浦圭介　1990「日本海北部における古代後半から中世にかけての土器様相」『シンポジウム土器からみた中世社会の成立』29-42.
水口由紀子　1989「考古遺物からみた中世成立期の様相」『文化財の保護』21：118-139.
村田晃一　1994「土器からみた官衙の終末　－東北地方の場合」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』第Ⅰ分冊：54-65、東日本埋蔵文化財研究会 .
百瀬正恒　1985「平安京及びその近郊における土器の生産と消費」『中近世土器の基礎研究』1：1-7.
百瀬正恒・橋本久和　1988「中世平安京の土器様相と各地への展開」『考古学ジャーナル』299：15-25.
森　隆　1993a「中世的土器生産の特質と成立過程（上）」『古代文化』45（5）：20-33.
森　隆　1993b「中世的土器生産の特質と成立過程（下）」『古代文化』45（6）：29-40.
森　隆　1993c「中世的地域社会の形成過程」『古代文化』45（12）：36-46.
森　隆　1992「中世土器の生産にみる地域型の提唱と工人集団の系譜について　－西日本の土器椀生産を中心とした」『中近世土器の基礎研究』8：3-54.
八重樫忠郎　1994「常滑・渥美窯産甕の 12 世紀後半における変化　－国産陶器一括廃棄事例から」『岩手考古』6：34-44.
八重樫忠郎　1997「輸入陶磁器からみた平泉　－分布傾向からの分析」『貿易陶磁研究』10：134-156.
八重樫忠郎　2014「平泉と鎌倉の手づくねかわらけ」『中世人の軌跡を歩く』23-38、高志書院 .
横田洋三　1981「出土土師皿編年試案」『平安京跡研究調査報告第 5 輯　平安京左京五条三坊十五町』46-55、古代学協会 .
横田洋三　1984「土師器皿の分類と編年観」『平安京跡研究調査報告第 11 輯　平安京左京四条三坊十三町　－長刀鉾町遺跡』54-58、古代学協会 .
横田洋三　1988「中世土師器皿と生産地」『滋賀県文化財保護協会紀要』1：77-85.
吉岡康暢　1991「中世的食器組成の成立と時期区分覚書　−90 年シンポに寄せて」『中近世土器の基礎研究』7：13-26.
吉岡康暢　1997「“カワラケ”小考」『国立歴史民俗博物館研究報告』74：125-129.
脇田晴子　1986「中世土器の生産と流通」『中近世土器の基礎研

究』2：93-115.
脇田晴子　1997「文献からみた中世の土器と食事」『中世食文化の基礎的研究　国立歴史民俗博物館研究報告』71：473-496.